



始



特 223
524



自序

歴史は繰返す。

第一次歐洲大戰が幾多の慘澹たる悲劇を残して終結を告げてから、廿一年目にして又も第二次歐洲大戰の砲聲が歐洲の天地に轟き渡り、東洋には興亞の聖戰が何時果つべくも知れぬ。だが、戦ひは形の上に現れるもののみではない。

人の一生が不斷の戦ひである如く、國の歴史も不斷の戦ひである。たゞそれが平和といふ假面を被つてゐるか、假面を脱ぎ捨て、血みどろの素顔を晒すのかの相違に過ぎない。一國を代表した外交官が、面に親愛の微笑を湛へつゝ握手を交はしてゐる裏面には、隙あらばと狙つて、匕首を研ぐ者が常にかくれてゐる。外交戰、宣傳戰、間諜戰、さうした戦ひは所謂戰時平時の境界なく、常に世界の空を暗く覆つてゐるのだ。しかもその武器なき戰爭に於ける犠牲が、どうかすると砲煙の下に横はるそれよりも大きい事さへある。

私は曾て歐洲に遊び、アメリカにも遊び、さうした事實の幾つかを見聞し、文献も集めてゐる。

ジャーナリズムの表面にあまり躍り出ない戦争の裏街道を、此の際覗いてみる事も意義があらう。 2

第一次世界大戦の歸趨を決したアメリカの参戦は、たつた一人の賣收された青年によつて決せられた。一國の軍事を統率すべき陸相が、敵國に通じてゐたが爲に生じた犠牲は何萬といふ數の同胞を血祭に上げてゐる。巨萬の資を投じ、國力の大半を傾倒して築いた要塞工事が不用意な青年の戯れから無價値に等しきものに化し去る。さういふ實例は枚擧に追かない。恐るべきはスパイの跳梁である。

今や歐洲には大戦勃發し、東洋には興亞聖戰未だ熄まず、戦雲廣く世界の空にはびこる時、彼等の暗躍跳梁は一層激しさを加へてゐる筈だ。スパイは何處にでもゐる。或は君自身が、いや僕自身も知らぬ間に彼等の傀儡になつてはゐないだらうか思ふだに恐ろしい事ではある。

私は自分の筐底に秘めて置いた文献を拾ひ集めて、此の一書を纏めた。諸君の自戒に何等かの参考ともならば幸である。廣く一般の愛讀に應じたい發意から、總て興味中心の物語風に描寫した微意を買つて戴ければ、筆者此の上もなき満足である。

目次

抹殺された偉勳者

孤立主義アメリカ.....	二
「四十號室」の功績.....	五
チンメルマン通牒の反響.....	九
大戦最大の偉勳.....	三三
見込まれた無電技師.....	一六
海軍情報部長の姪.....	二二
國境線突破.....	二七
クローイドンの朝霧.....	三三

謎の戦争製造業者

謎のイギリス貴族	三
皇后への贈物	四
僧衣の溺死體	五
ヨット上の會見	六
永遠の謎	七

妻に賣られた陸相

異色賣國奴事件	八
農學校教師の妻	九
國境を越えて來る餘德	一〇
陸相の苦衷	一一
妖僧ラスプーチン	一二
誕生宴の收獲	一三
賣國團暗躍	一四

皇女に似た賣春婦	一五
敗退したロシア軍	一六
逆間諜の功績	一七

噴火山上の女間諜

友軍將校の娘	一八
參謀將校の會話	一九
奇怪な少女の正體	二〇
針の上のランデヴー	二一
危機一髪	二二
不遜な怪農婦	二三

翻弄された防諜官

自殺を計る若い未亡人……………二二六

真紅のバラ……………二二〇

黒星つきの女間諜……………二三四

ギリシヤの商人……………二二九

裏切者の歩む道……………二四四

美しい鬼女の魅惑……………二四八

ハルピンに散つた花

踊る京人形……………二五二

奇怪なランデヴー……………二五六

惱ましい思ひ出……………二六一

恩愛二筋道……………二六六

日本の女……………二七三

撃滅されに行く大艦隊

ドツカーバンク悲劇……………二七九

ジプシー占術師……………二八三

一犬虚に吠えて……………二八六

波蘭獨立運動の志士……………二九〇

不用意な青年達

思はぬ不當利得……………二九六

新來の客……………一〇〇

危険な誘惑……………一〇四

美人女中の役目……………一一〇

獨身の老中尉……………一一四

妖魔の如く……………一二八

憂國の目醒……………二三
良品に追はれて……………二五
動く食器棚……………三一
結末……………三六

抹殺された偉勳者

孤立主義アメリカ

ヨーロッパに又戦亂が勃發した。一九一八年に第一次大戰が終結を告げてから、正に二十一年目である。

第一次歐洲大戰は一九一四年八月四日に、ドイツ軍による獨白國境進撃によつて、その幕が切つて落されたのである。そして今次の大戰はそれから二十五年後の九月、月こそ違へ同じ四日に英佛の對獨宣戰によつて開始されたといつてよからう。あゝ、何と宿命の四日であらうか。かつき屋にいはせると、四は死に通じるといふ。しかも第一次大戰は古今未會有の慘禍を残して、正に四年目に終結をみた。或る戦史家の語るところによると、今次の大戰も四年間は續くだらうと。

歴史は繰返す。過去が將來を示唆するものであるならば、今日第一次大戰の経過をたどつて、今次の戦亂を下する事も不可能ではあるまい。

第一次大戰はどうして終幕に立到つたか？ いふまでもなく、その原動力となつたものはアメ

リカの参戰である。ドイツは敵兵に一步も國境を越えさせる事なく、既にその先鋒はパリを砲撃距離内に置き乍ら、戦敗國の烙印を捺されてしまつた。こんな矛盾があるだらうか。若しアメリカがあくまで中立を嚴守してゐたならば、ドイツ軍はパリに城下の誓ひを立てさせてゐたかも知れない。ドイツは戦ひに敗れたのではなくて、アメリカの龐大な資本力に屈せざるを得なかつたのだ。

戦史家は今次の戦亂もアメリカの参戰によつて結末を告げるのではないかといつてゐる。だが果してアメリカは立つだらうか？ ルーズヴェルト大統領は英佛陣營に相當な同情を表し乍ら、戦亂不介入の中立宣言を行つた。モンロー以來の孤立主義者は、大統領の英佛に對する好意をさへ難詰して、あくまでも嚴正中立を主張してゐる。今の様子では容易に腰を上げさうにもない。

では、此の前の時にはどうであつたか？ 大戰の開幕に當つてドイツがベルジウムの中立を侵害し、大軍を以つてその國境に雪崩れ込んだ事に對して、アメリカの輿論はかなり沸騰したものだ。翌一九一五年五月には自國の豪華客船ルシタニア號が、ドイツ潜水艦の襲撃を受けて撃沈され、次いで又商船サセックス號が水雷にやられて沈没し、アメリカの民衆は極度に憤激したものだ。かくして幾度かアメリカの参戰が懸念され乍らも、平和主義者ウエルソン大統領は沸騰

する輿論を制壓して、容易に立たうとはしなかつた。その背後には無論、強く根を張つた孤立派のモンロー主義者の勢力もあつたし、表面に平和主義を振りかざして、漁夫の利に汲々たる政商連の壓力もあつたし、それからドイツ系ユダヤ資本の運動もあつたらう。現にアメリカが参戦をした前年、即ち一九一六年十一月にウキルソンは厳正中立を標榜して大統領選挙戦に立ち、壓倒的な勝利をかち得て再選されてゐる位で、恐らくそれ迄は大戦に参加する意志などなかつたであらう。

此のウキルソンの中立態度に對して、兎角ドイツ軍から壓せられ勝ちになつてゐた英佛陣營の爲政者連は、如何にしてアメリカを聯合軍側に誘ひ込むべきかに就いて、随分とあの手この手を用ひて刺戟したものだ。

イギリスの或る有力な新聞紙は、その社説にこんな罵詈を掲げてアメリカを揶揄した。

「アメリカは如何なる侮辱を浴びせられても、イギリス海軍がドイツUのボートを世界の海面から一掃し盡す迄は、恐ろしくて蹶起する勇氣がないのだ」と。

それでも起たなかつたアメリカが、ウキルソンが再當選してから半歳後の一九一七年四月、遂に國にを擧げて参戦を決したのである。何がアメリカをしてさうさせたか？

その「アメリカを動かした男」の話を書いてみやう。

「四十號室」の功績

英京ロンドンのダウニング街十番地に、「四十號室」と呼ばれる不思議な事務所があつた事は既にかなり有名になつてゐる。これは英海軍情報部の秘密事務所だ。國內は勿論、全歐洲、いや東洋、アメリカにまで擴がつてゐる諜報網は此の建物から發せられる指令に操られてゐたのである。その事務所の奥深い地下室には、晝も夜も間斷なく電燈が點ぜられ、蒼白い顔をした數十人の事務員が、血眼になつて働いてゐる。暗號電報の解讀事務を行つてゐるのだ。

「ヤツ、あつたく〜！ 大發見だツ！」

突然、一人の若い事務員が奇聲を發して席から躍り上つた。此の奇聲に多勢のおびえたやうな視線が、一齊に彼の上に浴せられる。

「何だ〜？」

『どうしたく〜?』

両側のデスクから不安さうに問ひかけた。

『たゝ、大變だ! これを見てくれ、これを……!』

若い事務員は手先を細かく震はせ乍ら、一枚の紙片を差上げてゐる。

『おい、しつかりしろ。大丈夫か?』

右側の一人が心配さうにボンと彼の肩先を叩いた。それもその筈である。ほんの二三日前にも同じやうな奇聲を發して席から躍り上つた男があつたのだが、それから一時間ばかり後には、その男は精神病院送りとなつたのである。終日終夜奥深い地下室に閉ぢ込められて、頗る難解な暗號翻譯をくり返してゐるのだから、大概の者は神經衰弱になつてしまふ。たまた家に歸つて休養をとらうとすると、ドイツ産の葉卷の襲撃に眠るところの騒ぎではない。葉卷といふのはツエツペリン飛行船の略稱だ。これでは神經衰弱になるのが當り前である。で、今迄に此の地下室の事務所からは、何人精神病院送りが現れたことか知れない。

同僚達は奇聲を發して躍り上つた若い事務員を、又何人目かの發狂者だと思つたのである。『まア見てくれ。間違ひぢやない。大發見だ!』

さういつてつきつける紙片を、同僚達は寄り集つて覗き込んだ。

——ドイツ、チンメルマン外相より、メキシコ駐在ドイツ大使エツクハルト氏宛の通牒——と冒頭に記してある。

『おほ、ほんとかい?』

『ほんとだとも。嘘だと思つたら諸君で翻譯してみるがよい。』

若い事務員ハール君は、デスクの上に擴げてある暗號電文を同僚達につきつけた。

同僚達は一齊に自分達の持つてゐる暗號原簿と引き較べて、電文の解讀に着手する。その電文にはこんな事が記されてあつた。

一九一七年一月十九日、ベルリンにて。

エツクハルト大使殿

ドイツは來る二月一日より無制限潜水艇戰を開始すべし。されどドイツはアメリカをして依然中立を守らしむるべく交渉中なれども、萬一その努力無効に終りアメリカが聯合軍側に參戰する場合には、速かに貴下の手によりてドイツ、メキシコ間に同盟條約締結を策されたし。條件

大要左の如し。

一、戦争開始及終了はドイツと同一行動を執るべき事。
一、ドイツは財政的にメキシコを援助し、戦後に於いてメキシコが一八四八年に失ひたるニュー・メキシコ、アリゾナ及びテキサス等の領土回復を承認すべし。
猶ほ細部の事項は貴下に一任す。

カランザ大統領(メキシコ)に對しては極力好意を示しつゝ態度を監視し、若しカランザに對し米開戦の意志ある事を確認したる場合は、彼を懲懲して日本をも對米開戦に誘致せしめ、同時に日獨同盟の仲介の勞を執らしむるやう盡力せられたし。これが爲には、イギリスは數ヶ月を出でずして、ドイツの無制限潜水艇戦に屈伏し、平和を提唱するに到るべき事を強調し、カランザ大統領を説伏するやう御努力を乞ふ。

外務大臣

チンメルマン

此の重大な秘密電文は、直ちに「四十號室」から海軍大臣へ、海軍大臣から首相へ回附され、即日重大會議が開かれた。

その夜、駐英アメリカ大使ウォルター・ページが、急遽招かれて外相官邸に馳けつけた。その結果がどうなつたらう。

チンメルマン通牒の反響

一九一七年二月二十四日の深夜午前二時、ウキルソン・アメリカ大統領は、突如消魂しく鳴り出した電話のベルに寝入ばなの夢を破られた。何事か重大事件の突發に違ひない。彼はベットから起き上つて、卓上の受話器を耳に當てた。

「閣下、ロンドンから至急電報が参りましたが……」

「すぐに持つて來給へ」

大統領はバジャマの上にナイトガウンを纏つて、ぢれつたさうに室内を歩き廻り乍ら、秘書官が電報を持つて來るのを待ち詫びた。

間もなくコツ／＼と扉をノックして、秘書官が扉口に姿を見せると、彼はその手から奪ひ

取るやうに電報用紙を取つて開いた。

——數時間後に重要な電報を發すべし。御用意ありたし。ウォルター・ページ——
とある。大統領の面上に何事かサツと緊張の色が漂つた。

續いて又電話器のベルが追つかけるやうに鳴出した。秘書官が受話器を耳に當てたかと思ふと、
「閣下、國務長官閣下であります」

といつて、その受話器を大統領に渡す。

「君のところにも來たのかね？ ページ大使から？」

「さうです。どうしたものでせう？」

「何か容易ならん事に相違ない。すぐに官邸へ來て貰はう。それから、暗號解讀者を用意して置かなければならんね」

「さうですな。すぐに参ります」

國務長官は時を移さずホワイトハウスに馳けつけた。だが、なか／＼その重要電報が到着しない。朝になると全閣僚が召集されて、秘密協議室で待機する事になつた。

やうやくその電報がホワイトハウスに舞ひ込んだのは、その日の午後二時頃の事であつた。直

ちに暗號解讀者によつて翻譯され、二通の電文が秘密協議室に持込まれた。その一通には、

ウキルソン大統領閣下。

余は昨夜イギリス外務大臣バルフォア卿の招きを受け、官邸に赴きて別紙のドイツ外務大臣チンメルマン氏よりメキシコ駐在ドイツ大使エツクハルト氏宛秘密書簡を提示せられたり。該書簡はナウエンより發信せられたる無電を英國情報局にて傍受し、暗號を解讀したるものなり。

と記してある。もう一通の電文は、いふまでもなく前記「チンメルマン通牒」の復寫である。此の二通の電文を中心に卓を圍んでゐた閣僚達の顔面に異様な緊張が漲つてゐた。大統領は暫くちつと考へ込んでゐたが、

「これは慎重な態度で臨まなければならん。老獪なイギリスの手にのせられるやうな事があつてはならんからな」

とつぶやくやうに獨語をした。

イギリスは今迄に幾度か、アメリカを聯合軍側に引込まうとして、老獪極まる外交手段を弄し

てゐる。今度のも或はそれではなからうかといふ疑念が、彼の頭腦をかすめたのである。直ちにページ大使に宛て、ドイツの暗號で記された此の書簡の原文を借受け、大使館の手で解讀してみろといふ返電が發せられた。大使は此の返電を受取ると、早速イギリス外務省を訪問して、暗號原文とそれを解讀するに必要な暗號原簿の借受け方を交渉した。そして暗號研究の専門家であり、當時大使館の一等書記官をしてゐたエドワード・ベルに命じて、その眞疑を確かせる事にした。

外務省からは「チンメルマン通牒」の原文の他に、その後と發見されたこれに關聯を持つ暗號電文を一纏めにして、イギリス大使館に送り込んで來た。その中には日獨墨間の同盟交渉に關する文書が、次々と現れて來た。

此の報告に接したウキルソンは、もう孤立主義の平和に立つてもつてゐる場合ではないのを感じた。うつかりしてゐると、ドイツの魔手が隣國から國境を越えて來るかもしれない。太平洋を越えて來るかもしれないのだ。

四月初旬に開かれた議會の勢頭、大統領は自から壇上に立つて此のチンメルマン通牒の全文を朗讀した。議場は沸き返るやうなセンセーションを捲起し、一舉にしてアメリカの參戰が議決さ

れたのである。

かくして遂に四月七日附を以つてドイツに對する宣戰布告が發せられ、パーシング將軍に率ゐられた四十箇師團の精銳が、大西洋を渡つて西部戰線に押し寄せたのだつた。

大戦最大の偉勳

「四十號室」に働く若い事務員ハール君は、特に海軍大臣に招かれて「チンメルマン通牒」發見の功を賞され、

「貴下は大戦中最大の偉勳者である」

といふ最大級の讃辭の盛られた感状を授けられた。正にそれに違ひない。若しあの時アメリカが蹶起してゐなかつたとしたら英佛聯合軍は、ドイツとその位置を逆にしてゐたかもしれないのだ。

だが、此の「チンメルマン通牒」發見に關しては、ハール君の他にそれ以上の偉勳者がもう一人ゐる事を見逃してゐるのだ。

それは此の暗號原文を解讀するのに必要なドイツの暗號原簿を手に入れた人物である。イギリス情報局の發表するところによると、造船工上りの海軍練習學校教官イー・シー・ミラーといふ水兵が、ケント海岸沖で爆沈されたドイツ潜水艦の調査を命ぜられ、海底深く潜つて行つて船腹をコヂ開け、遂に士官室に入り込む事に成功して、そこにあつた金庫の中から此の原簿を發見して來たのだといふのである。

確かにさういふ事實はあつた。彼はドイツの優秀な潜水艦の構造を調べるのが目的で、暗號原簿の方はその副産物として偶然發見したのである。然し此の副産物がどれ程貴重な功績を、イギリス海軍に提供した事かしれない。潜水艦根據地から發する指令無電を傍受して、Uボートの所在を確めて襲撃したり、暗號を利用してUボートに偽電を發しておびき寄せ、潜水艦襲撃用の偽裝船Qボートを派遣して撃沈したり、此の原簿のお蔭で犠牲となつたドイツの潜水艦の数は相當なものだ。Qボートといふのは、全然武装のない貨物船を裝つて、實は甲板の下に隠顯砲塔をかくし、ドイツ潜水艦の出沒しさうな海上を游弋する假船だ。潜水艦が好餌ごさんなればかり近寄つて來ると、一生懸命逃げるやうなふりをし乍ら敵を傍まで引つけて置き、時を見計らつて砲塔を引上げ、ズドンと一齊射撃を浴せる仕掛なのである。キャンベル大佐などといふ男は、此

のQボートの船長として勇名を轟かしたものである。

ミラーは暗號原簿發見の功によつて、厚い恩賞にあづかつた。然し彼は「チンメルマン通牒」發見の際には、その原動力として何等の恩賞にもあづかつてはゐない。彼が原簿を發見したのは一九一五年の事だから、既に時効にかかつてゐるとでもいふのだらうか？ その功績が時効にかゝつてゐるとすれば、暗號原簿の方も時効にかゝつてゐる筈である。いつ何時敵國の手中に盗みとられてゐるかも知れない暗號の鍵を、一年以上も變へずに同一なものを使用し続けるやうな事を、優秀なドイツ情報局がする筈はない。いや、たとへあつたとしても、重大な外交關係の指令に用ひる暗號と、潜水艦に行動指令を發する暗號とが、同一なものであらう筈がない。

後日イギリスがその偉勳をミラーの上に冠せたのは、「四十號室」の罪惡をカモフラージュする爲にしかすぎない。戦後一九二九年十一月二十一日に、ロバート・バルフル博士といふ法學者が、エジンバラ大學で此の暗號書竊取事件を論じて此の點を指摘し、

——この聯合國側にとつて最も偉大なる功績に對し、賞揚さるべき人物がゐないといふ事は、實に痛ましき事實といはなければならぬ。云々。

と語つてゐる。

何故こんな偉大な人物をひしがくしにしなければならぬのか？ いったいその眞實の偉勳者とは何んな人物なのだらう？

一九一六年の末近い頃、何時何處でどうして消え失せたのか、地球上から忽然と姿を消してしまつた一人物がある。アレキサンダー・セツクといふオーストリア人の青年無電技師だ。此の男がアメリカを動かした偉勳者である筈なのだが、誰一人としてその消息を知る者もないし、イギリス當局は専ら此の男の存在を抹殺する事につとめてゐるのだ。さて、その謎に包まれた男の話を書くとしやう。

見込まれた無電技師

大戦の當初の頃、國境を越へてベルジウムに侵入して來たドイツ軍が、首都ブラツセルを占領した時の事である。司令部附の一將校がセツクといふ富裕な工業家の邸宅を宿舎にした。セツク氏は元來オーストリア人で、ウキーンでは上流社會に出入し、宮廷にも屢々招かれた事のある

程の身分であつたが、取柄關係上ブラツセルにも邸宅があつて、その當時は一家が此處に住んでゐたのである。

セツク氏の夫人はイギリス生れで、二人の間にアレキサンダーといふ若い息子があつた。彼は趣味として無線電信の研究に耽つてゐたので、邸内に小さな研究室を設けてゐた。相當完備した受信装置などがあつたので、若しや間諜の嫌疑でも受けてはいけないと思つて、彼は自分からその將校の居室を訪ね、

「僕は無電の研究をしてゐますので、自分で造つた受信装置を持つてゐますが、諜報機關にでも關係があると思はれては困りますから、前以つてお届けして置きます」と申出た。

「さうですか。それはなか／＼感心だ。一寸見せて貰ひますかな」といふ將校の言葉に、彼は先に立つて研究室に案内し、詳しく説明して聞かせたのである。將校がその事を司令部に報告すると、翌日電信隊の専門將校が出張して、數時間に亘つてその装置を點檢した。ところが彼の自製受信装置なるものは頗る精巧を極めたもので、當時ドイツの軍隊が携帶してゐたものよりは、遙かに優れた性能を有してゐる事が判つた。で、電信隊の將校は上

ブラッセル占領地司令部で早速彼の身元を調査してみると、セツク家が同盟國オーストリアの人間であり、身分も確りしてゐるし、母親がイギリス人ではあつたが、もうすつかりオーストリアの風習になじんで、ドイツに對する敵意などは毛頭持つてゐないらしい。その上、アレキサンダー青年の評判も頗る良く、何一つ申分のない條件だつた。

そこで或る日、彼を司令部に呼び出して、參謀將校からドイツ軍に無電技師として從軍してはどうかとすゝめてみた。すると、

「私でお役に立つのでしたら是非働かせて下さい。喜んでお手傳ひ致します」といふ返事だ。で、彼は早速ブラッセルのドイツ軍無線電信所に、軍屬として勤務する事になつたのである。

彼の優れた無電に關する才能は、次第に上官に認められるやうになり、二年後にはその電信所の最も重要な仕事を分擔するやうになつた。當時、そこではドイツ政府と參謀本部の極めて重要な電報が、絶えず受信されてゐた。無論、それらの電文は頗る難解な暗號によつて綴られてゐる。その暗號原簿はベルリンの大本營、陸軍省、外務省、占領地總督府、在外ドイツ大公使館など、重要な個所だけに配布してあつて、その使用も極めて重要な事項のみに限られてゐた。

司にこの事を報告し、彼をドイツ側で利用してはどうかといふ意見を傳へた。

彼は極めて小人数の同僚と晝夜交代で特別室に立籠り、占領地總督府宛の秘密通信を受信して、それを暗號原簿によつて解讀翻譯する仕事を受持つやうになつた。

一九一六年の春の或る日の事である。晝間勤務を終つた彼が、歸路いつも立寄るカフェーに足を休めて、熱いコーヒーに咽喉をうるほし乍ら、途中で買つて來た夕刊を讀んでゐると、突然、

「あらまあ、ジョージさん！」

と呼びかける女がある。ジョージなどと呼びかけられるわけがないので、誰か他の客の事だろうとは思ひ乍らも、若い異性の呼び聲にふと注意をひかれて、何氣なくその方に眼を轉じると、すばらしい美人がニッコリ媚笑をたゞへ乍ら、チツと彼を見守つて立つてゐるではないか。その瞬間、彼はドキツと胸の躍るのを感じた。

「あの……僕に御用ですか？」

「あら、ごめん遊ばせ。あんまりよく似てらつしやるので、人違ひ致しましたの。ほんとに失禮致しました」

女は顔を赤らめて詫びるのである。

ブラッセル占領地司令部で早速彼の身元を調査してみると、セツク家が同盟國オーストリアの人間であり、身分も確りしてゐるし、母親がイギリス人ではあつたが、もうすつかりオーストリアの風習になじんで、ドイツに對する敵意などは毛頭持つてゐないらしい。その上、アレキサンダー青年の評判も頗る良く、何一つ申分のない條件だつた。

そこで或る日、彼を司令部に呼び出して、參謀將校からドイツ軍に無電技師として從軍してはどうかとすゝめてみた。すると、

「私でお役に立つのでしたら是非働かせて下さい。喜んでお手傳ひ致します」といふ返事だ。で、彼は早速ブラッセルのドイツ軍無線電信所に、軍屬として勤務する事になつたのである。

彼の優れた無電に關する才能は、次第に上官に認められるやうになり、二年後にはその電信所の最も重要な仕事を分擔するやうになつた。當時、そこではドイツ政府と參謀本部の極めて重要な電報が、絶えず受信されてゐた。無論、それらの電文は頗る難解な暗號によつて綴られてゐる。その暗號原簿はベルリンの大本營、陸軍省、外務省、占領地總督府、在外ドイツ大使館など、重要な個所だけに配布してあつて、その使用も極めて重要な事項のみに限られてゐた。

お断り

印刷の手落ちにより一
九頁の第壹行が一八頁
の第壹行になります

彼をドイツ側で利用してはどうかといふ意見を傳へた。

彼は相とて小人妻の同僚と晝夜交代で特別室に立籠り、占領地總督府宛の秘密通信を受信して、それを暗號原簿によつて解讀翻譯する仕事を受持つやうになつた。

一九一六年の春の或る日の事である。晝間勤務を終つた彼が、歸路いつも立寄るカフェーに足を休めて、熱いコーヒーに咽喉をうるほし乍ら、途中で買つて來た夕刊を讀んでみると、突然、
「あらまあ、ジョージさん！」

と呼びかける女がある。ジョージなどと呼びかけられるわけがないので、誰か他の客の事だろうとは思ひ乍らも、若い異性の呼び聲にふと注意をひかれて、何気なくその方に眼を轉じると、すばらしい美人がニッコリ媚笑をたゞへ乍ら、チツと彼を見守つて立つてゐるではないか。その瞬間、彼はドキツと胸の躍るのを感じた。

「あの……僕に御用ですか？」

「あら、ごめん遊ばせ。あんまりよく似てらつしやるので、人違ひ致しましたの。ほんとに失禮致しました」

女は顔を赤らめて詫びるのである。

彼はとんだ人違ひに軽い失望を感じたものだつた。ところが、その翌日も、又その翌々日も、彼が歸りがけにカフェーに立寄ると、その美人が先に來てゐて、彼の腰をかけるテーブルの傍に陣取つてゐる。

「まア、又お會ひしましたわね。先日は失禮致しました」

ニツコリ笑つて女から聲をかけられると、アレキサンダーの胸は異様にときめいた。

「なアに、何でもありません。よくある間違ひです」

「でもほんとによく似てらつしやるので、びつくりしてしまいましたのよ。こんな所に來てゐる筈はないのに……」

「何處にゐらつしやる方なんです？」

「戦線に行つてゐますの」

といつてから、女はふとあたりを見廻して椅子をにじり寄せ、急に小聲になつて、

「それもイギリス軍なんですの」

といふ。彼は女のむせるやうな體臭に、恍惚となりかけてゐた。

「成程、實は僕の母はイギリス人ですから、何處かにイギリス風の面影があるせいなんですせう」

「まア、あなたも……？ 私のも實はイギリス人なんですのよ」

「さうですか。これは不思議だ！」

「ほんとですわね。奇縁ですわ」

そんな話から彼女の語るところによると、彼女の父はベルギー軍に従軍して、今は何處の戦線に行つてゐるのか生死さへわからず、母は既に他界して亡く、たつた一人田舎に置去りにされた淋しさに、漂然とブラツセルへ來てゐるのだといふ。

アレキサンダーはそれ以來、電信所の歸路此のカフェーに立寄る事が、重要な意味を持つやうになつてしまつた。夜勤の時にはわざ／＼早目に家を出て、勤務時間までのひとときを彼女と過すのが、毎日の日課のやうになつてしまつた。

海軍情報部長の姪

僅か一ヶ月ばかりの間に、アレキサンダーと彼女との仲は、もう離れ難いものに進展してゐた。

或る日、彼が晝間の勤務を終つて、彼女と會ふ爲にいそくとカフェーに立寄ると、どうした事か彼女はいつになく憂鬱な面持で、何か物思ひに沈んでゐる。

『どうしたんです？ 何を考へ込んでゐるんです？』
心配さうに彼が尋ねると、彼女は涙さへ浮べて答へるのである。

『私、もう間もなくあなたとお別れしなければなりません。私の經濟状態ではさういつ迄もブラッセルに遊んでゐるわけには行かないんですもの』

『あゝ、そんな事ですか。ハツハ、』
アレキサンダーはホツとして笑つてから、

『どうでせう、僕と結婚してくれませんか。それであなたの悩みは全部解決されるぢやないですか』

『まア……ほんとですか？』

彼女の顔に嬉しさうな微笑が浮んだのを見ると、彼は勇躍して家に飛んで歸り、早速父親に彼女の事を打明けて、結婚の許しを乞ふたのである。ところが、喜んで許してくれるつもりだつた父の返辭は意外だつた。

『それだけは思ひ止つてくれんか。僕は今日迄誰にもいはなかつたが、お前のお母さんがイギリス人であるが爲に、僕は心中どんなに苦しい思ひをしてゐるかしれんのだ。國際間がいつも平和であつてくれれば、なんでもない事なのだが、こんな時局になつてみると、僕の胸の奥には祖國を愛する熱意が燃え立つてゐ乍ら、敵國人の妻への遠慮から僕はそれを表面に現はす事ができないのだ。いや、お母さんは敵味方といふやうな感情は全然持つては居らんだらう。だが、自分の生れた祖國を滅亡させる爲に、夫が力瘤を入れてゐるのを見たら、決していい氣持はせんにきまつてゐる。お前は僕の心持がわかつてくれるだらうな。僕は此の苦しみをお前にもなめさせたくはないのだ。わかつたかな』

諄々として説かれてみると、温厚な父に逆らふ氣力もなくなつてしまふ。翌日の夕方、今度は彼の方が萎れ返つて、彼女の前に立たなければならなかつた。

『どうなすつたの？』

女が今度は心配さうに問ひかける。

『父が許してくれないのです。國際結婚はいけないといつて……』

『まア……』

二人の間に暫く沈黙が続いた。と、

「ねえ、セツクさん、私もうあきらめて、遠い所へ行つてしまひますわ」

突然女が絶え入るやうにいひかけた。

「え……？ 遠い所つて何處です？」

「イギリスですの。母の故郷へ」

「イギリス……？ 冗談仰しやい。どうして行かれると思ふのです」

ベルジュームの國境は蟻の這ひ出る隙もない程嚴重に、ドイツ占領軍によつて封鎖されてゐる。それを若い女の身空でどうして突破する事ができやう。しかもイギリスは敵國ではないか。

「ところが私には道があるのよ。あなたが誰にも仰しやらないと約束なされば、言つてもいゝんですけれど……」

「いふもんですか。あなたの不利になるやうな事を」

「實はね、イギリスに母の兄がゐるのですけれど、その伯父が計らつて下さるのよ」

「たとへ伯父さんがどう計らはうと、此の國境を越えて行かれるもんですか」

「いゝえ、行かれますわ。私の伯父は海軍大將のサー・レチナルド・ホールといひますのよ」

「えッ……？ サー・レチナルド・ホール……？ ちや有名な海軍情報部長ぢやありませんか？」

「えゝ、さう。だから行かれるといふのですわ。伯父の部下達は今でも始終國境を突破して、ロンドンと往來をしてゐるのですつて」

「成程、さうですか」

アレキサンダーは唸めくやうな聲で背いた。その瞬間、彼の顔色が眞つ蒼になつたのを、女はちつと注意深く見守つてゐる。が、その鋭い瞳とは反對に、いとも悲しげな聲を出して彼女は彼の耳許にさゝやいた。

「さうなれば、もう永遠にあなたとはお會ひできなくなるかもしれませぬわね」

「僕……、僕も一緒に行くわけにはいきませんか」

アレキサンダーは悲痛な決意の色を見せた。

「まア、何を仰しやるの。あなたには御両親がおりぢやないの。それにあなたはオーストリア人ですから、イギリスに入る事なんかできやしませんわ」

「そこを一つ、あなたから伯父さんにお願ひしていただくのですよ。いけないかしら？」

「さうね。そりや何か立派なお土産でも持つて行けば……」

「立派なお土産ですつて？ 僕は何でも持つて行きますよ。あなたは伯父さんの趣味を御存知でせう？ 教へて下さい。僕、どんな事でもして調べてみせますから」

「まあ、あなたはそんなに私を愛してゐらつしやるの？」

「無論です。僕はあなたの爲でしたら、両親でも故郷でも捨てる覚悟です」

「さう。それなら私の意見をいつてみますわね、参考の爲に。伯父が今、何よりも一番喜ぶお土産といつたら、ドイツ軍の最高司令部で使つてゐる暗號帳だと思ひますわ」

「えッ……？ 暗號帳……？」

アレキサンダーは息がつまるかと思つた。

「いけません？ でも、あなたならわけなく手に入れる事ができるぢやありませんか。それとも
454』

「……………」

アレキサンダーは流石に暫くは答へる事ができなかつた。が、聽て心の闘争を征服するやうな強い語氣で答へた。

「いゝです。その土産物を調べてませう」

國境線突破

アレキサンダーは早速恐ろしい土産物の調達に着手する事になつた。彼の最初の計畫では、二冊の厚い暗號原簿をそつくり盗み出すつもりだつたが、彼女の周到な注意によつてその計畫を變更しなければならなかつた。

「だめよ。暗號帳が盗みとられたとわかつたら、ドイツではすぐにその暗號を廢止して、別に新しい暗號法を考へ出すでせう。さうしたら折角のお土産が、全然意味をなさなくなつちやふぢやありませんか」

成程、それに違ひない。そこで彼は特に勤務人員の少ない夜勤の夜を選んで、二冊の原簿の各頁を堪念に騰寫する事にした。アルファベットの各文字を總て數字に換へて表にしたものと、三百六十五日のそれ々の日に應じて、基礎數字と文字とを對照したものと、それを全部寫しとる危

険作業には、かなりの日数を要した。いつか春も暮れ、夏も過ぎて、早くも秋風が吹き始めてゐた。彼女はその間根氣よく、彼の難事業が終るのを待つてゐた。やうやく事業が完成すると、彼はやはり彼女の注意に従つて知り合ひの醫師から診断書を書いて貰ひ、強度の神経衰弱を理由として無期缺勤願を提出した。

『理由もなくあなたが急にゐなくなれば、きつと疑ひを抱かれますわ。總て合理的にやらなげりやだめよ』

といふのである。

總ては合理的に手順を終つて、彼は病氣休養の許可を得る事に成功した。同僚達には暫くオランダの海岸へ轉地をするやうに觸れたのである。

或る夜、彼は彼女から一人の眼の鋭い中年紳士を紹介された。伯父のレチナルド・ホール大將の部下と稱する男だつた。

『さ、それではこれからすぐに出發です』

その男は半ば命令的にいふのである。

『え……？ これからすぐに……？』

『さうです。一刻も猶豫をしては居られんです』

『でも、僕は何も仕度をしてゐませんから……』

『いや、仕度なんか必要ありませんよ。これさへあれば』

男は靴の中に納めた土産物を、しつかり小脇に抱へて微笑した。

一臺の古くさい馬車が彼等を待つてゐた。戦争前には都會のまん中などで滅多に見られる代物ではなかつたが、戦争になつてから文化的な乗物は盡く微發しつくされて、そんな古馬車までも横行してゐたのである。これなら都會を走らせても、田舎道を走らせても、誰も奇異に思ふ者はない。ガタ／＼ゴト／＼と古馬車は眞つ暗な町を走つて、いつか郊外の田舎道にさしかゝつてゐた。二時間……三時間……夜は全く更け渡つてゐる。

突然馬車が止つた。前方の闇空を鋭い光芒が、右に左に交錯してゐる。國境監視の探照燈だ。

『こつちへ來給へ！』

馭車に化けてゐたさつきの男が、命令的に聲をかけて、こんもりとした雑木林の奥に入つて行く。アレキサングーはしつかりと彼女と手を握り合つて、その後に行つた。總て、その雑木林の中にある數百年も経たかと思はれる古木の幹が、彼等の前をさへぎつた。懐中電燈の光が

忍びやかにその幹の根元を照すと、そこには人一人がやうやく潜れる程の洞穴があつた。

『すぐ後に續いて來給へ。いゝかね』

男はさういつて頭から洞穴の中に姿を消した。躊躇してゐるアレキサンダーの後から、

『さ、何をしてらつしやるの。早くお入りなさいよ』

彼女がじれつたさうに促した。

中はまつ暗である。懐中電燈がサツと輝くと、意外にもその洞穴から地下に向つて、階段が延々と續いてゐる。しかもそれがちやんとコンクリートで造つてあるではないか。階段を降り切ると、その下は立派な坑道になつてゐた。それが何處迄も續いてゐる。

ぬけ道といふものは何處にでもあるものだ。ベルジウムからオランダに通じる國境線の嚴重な事は、全くお話にならない程だつた。二重にも三重にも張りめぐらされた鐵條網には、強力な電流が通じてあつて、一寸でもそれに觸れた者は、一瞬にして眞つ黒焦げになつてしまはなければならぬ。五十米置きに監視哨が設けられ、夜になると強力な照明燈がそこから八方に放射されて、晝よりも明るく照し出されるといふ有様だ。だが、どんな強い光線でも地下迄は透らない事を、ドイツ軍の人々は忘れてゐたらしい。

一時間餘りも黙々と坑道を進んで行くと、甕で廣々とした草原のまん中に道が開けた。もう國境線を越えてオランダ領に入つてゐたのである。まだ夜は明け切つてはゐない。先頭に立つた男が懐中電燈で、何かモールス信號のやうなものを送つたかと思ふと、彼方の曉闇の中に飛行機のエンヂンの音が起つた。

『さ、急がう。もう準備はできてゐるのだ』

男はさういつて草原の中を急ぎ出した。すると間もなく彼等の目の前に出發準備の整つた飛行機が待つてゐた。

先頭の男はいきなり機上に飛び乗つた。

『さ、早く乗りませうよ』

彼女に促されて、アレキサンダーも恐る恐る乗り込んだ。彼はもうすつかり自分のとつた行動に後悔してゐるらしく見える。が、彼のそんな意志には頓着なく、飛行機はもう大地を蹴つて滑走を開始してゐるのだつた。

クロイドンの朝霧

その朝、ロンドン郊外のクロイドン飛行場に、まだ消えやらぬ朝霧を衝いて、何處から飛んで来たのか一臺の飛行機が着陸した。エンジンの停止するのを待ち兼ねて、その傍に駆けつけた人々の中に、白髪を交へた立派な老將校が一人ゐた。

機上からヒラリと眞つ先に飛び降りたのは、操縦席にハンドルを握つてゐた飛行服の男だ。いきなり風除け眼鏡を外して、老將校の前に擧手の禮をするのを見ると、それはブラツセルでアレキサンダー達の案内に立つた男である。

「いや、御苦勞ぢやつた、トレンチ君。大成功ぢやつたさうぢやね」

老將校が握手の手をさしのべる。

「は、完全に任務を遂行して参りました。閣下」

さういひ乍ら、彼は右腕に抱へてゐた鞆を老將校の前に差出す。

「御苦勞〜！」

老將校はその鞆を受取つて、傍らの副官らしい士官に手渡した。

トレンチ君と呼ばれた男は、英國海軍情報部の腕利きとして知られるトレンチ大尉だったのである。彼は老將校との挨拶を終ると、再び機翼に片足をかけて、機上にもう一人残つてゐる女性に手をさしのべ、助けるやうにして降ろしてやつた。そして彼はその女性を老將校に紹介するのである。

「閣下、私のパートナーとなつて活躍してくれた婦人を御紹介します」

と老將校にいつてから、今度は傍の女性に向つて、

「君、情報部長サー・レヂナルド・ホール大將だよ」

と老將校を紹介する。

「いや、御苦勞ぢやつた。何れ充分のお禮をしますぞ」

大將はニツコリして彼女の右手を固く握りしめた。彼女こそは、アレキサンダー青年にホール大將の姪だと名乗つた女である。だが、なんと他處〜しい伯父姪ではなからうか。彼等一同はイギリス海軍のマークの入つた高級自動車に乗り込むと、そのまゝクロイドン飛行場の砂塵を蹴

つて走り去つて行つた。

おや！ オランダの草原から飛び立つ時には彼等二人の他にもう一人乗員があつた筈だ。アレキサンダー・セツクはどうしたのだらう？ トレンチ大尉もパートナーの女も、そんな事はケロリと忘れ果てゝゐるかのやうに、知らん顔をして立去つて行くのである。

その後に残された飛行機の中には、いくら捜してみても人影どころか、鼠一匹も潜んではゐない。恐らく純情な青年は、ドーバー海峡の磯のお腹の中か、それとも遙かな天國の彼方で、新婚氣分の幻滅をかみしめてゐる事だらう。

それきりアレキサンダー・セツクの話は、地球上から永久に抹殺されてしまつたのである。戦争が終つてから彼の父は、巨費を投じて一粒種の捜査を試みたが、イギリスに渡つたらしいといふ噂の他は、何も掴む事ができなかつた。

それから餘程経つてから、外國の諸新聞が大戦中のスパイ事件を曝き立て、此の暗號窃取事件をも取り上げてゐるのを見て、セツク氏は、はじめて息子が英國に誘き出された事を知り、早速レチナルド・ホール大將に宛てゝ親書を送つて、愛兒の消息を知らせて欲しいと嘆願してみた。然し、一九二一年五月三日附で大將から届いた返信は、頗るあつけないものだつた。

— 御照會にかゝるアレキサンダー・セツクなる者の姓名は、小生未だ一度も聞き覚え無之候 —

(終)

謎の戦争製造業者

謎のイギリス貴族

諸君はいつかバジル・ザハロフといふ人物の名を耳にした事がありませんか。いや、ある筈だ。若し度忘れをしてゐられるのなら、改めて御紹介して置かう。

彼はヨーロッパの千萬長者だ。あへて筆者はヨーロッパといふ宏大な地名を用ひる。何故ならば、彼はフランスの市民権を有し、イギリスから卿として貴族の稱號を與へられ、曾てはギリシヤの支配者に擬せられた事もあり、生國はトルコのコンスタンチノーブルの近くだともいふし、スラブ系の猶太人だといふ人もある。兎に角、八十何歳かで此の世に終りを告げる迄、遂に彼が何國人であるかといふ事が不明のまゝ過ぎてしまつたのだ。

が、その大きな謎に就いては後でゆつくりと筆を進めるとして、どうして此のバジル・ザハロフの名がそれ程有名であるかを、先づ紹介しなければならぬ。

或る文化批評家は彼に「戦争製造者」といふ異名を奉つた。多少好意的に評する人は「世界の

武器王」とか「軍需王」とか稱する。要するに、彼の名聲をかくも世界的なものにしたのは、彼が優れた武器の賣込み商人であつた事であり、彼の巨萬の富も、輝かしい榮譽もそれによつて獲得したものであり、同時に平和論者、人道主義者から蛇蝎の如き憎惡を向けられるのも、原因はそこにあるのだ。

メフィストはファウストにマルガレーテへの戀の惱みを植ゑつけて、それを遙かに眺め乍ら嘖つた。だが、ザハロフに至つては、或る國と國との間に争ひを起さしめて、その兩國に武器を賣り込んで金を儲けたのだ。たゞ嘖つて傍觀してゐる事を樂しんだメフィストは、ザハロフよりも遙かに罪が軽い。ザハロフは悪魔以上の男だともいへる。

彼が金を儲ける爲に起させた戦争で、何百萬人の貴重な生命が失はれた事だらう。彼の賣り込んだ武器は、何千萬人の愛國者の身體を傷つけた事だらう。しかも、その功勞によつて、彼は英國からナイトの勳爵を贈はつたのだから、紳士の國と稱する英國も、實にいい加減なものではないか。

歐洲大戦の半ば頃、西部戦線で歴史的な勝利を博したドイツ軍が、一舉にフランスの首都パリを攻略しようとしてゐた。パリが落ちてしまへば、聯合軍の惨敗で大戦は終了してしまつたかも知

知れない。そんなに早く戦争が終つたのでは、武器商人の儲ける期間がなくなつてしまふ。何とかしてもつと戦争を長びかせなければならぬ。それには聯合軍側にもつと有力な味方を造らなければいけない。それにはアメリカが一番い。

アメリカが大戦に加はつた最も直接の誘因は、例のドイツ潜水艇のルシタニア號爆破事件で、アメリカの輿論が激昂したからだ。如何に無鐵砲なドイツでも、アメリカを敵に廻す事の不利は充分に知つてゐた筈だ。にもかかはらず、此の暴舉を敢てしたのは何故だらう？

その頃、大西洋に游弋してゐたドイツ潜水艇に、本國海軍當局の暗號無電の指令が到着したからだ。だが、ドイツ海軍當局ではそんな無茶な無電指令を發するわけがない。では、そのルシタニア號爆破命令の怪無電は、いつたい何處から發せられたものだらう？

無論、こんな事は軍事研究家と稱する人々の想像なのだから、何處迄が確實であるかはわかつたものではない。だが、その頃イギリスの諜報機關で、ドイツ海軍の用ひてゐる暗號を盗みとつてゐた事は事實である。で、此の怪指令の出處はその邊ではなかつたかといはれてゐる。

ザハロフはロイド・デョーチをはじめ、イギリス官邊の有力者に知己を多く持つてゐる。従つて、彼にはイギリス當局を或る程度まで動かす事もできるのだ。そこで結局は、ルシタニア號事

件もザハロフの考へ出した頗る陰險な戦争延長策ではなかつたかとまでいはれてゐるのだ。

或はさうでなかつたかもしれないが、そんな事にまで引つぱり出される程、ザハロフは武器の商賣にかけて目のない男だつたのだ。

さて、それ程有力な名士であるザハロフ卿が、何處で生れてどうして育つて、軍需工業界の大立物に成り上つてしまつたのか、世界中に誰一人正確な事を知る者がなといふのは、いつたいどうした事だらう。

ザハロフの傀儡として曾てギリシヤの首相になつたスターラーデイスの説に従へば、彼は小アジアのムラガといふ町の、貧しい商家の生れで、後にロシアのオデッサに移住したのだといふのだが、これとても何處迄が眞實だか知れたものではない。或る者は彼を殺人罪を犯して脱獄した男だといひ、窃盜犯で放浪を餘儀なくされたお尋ね者だといひ、様々な臆説が流布されてゐるに係らず、彼自身は固く沈黙を守つて、あへて辯明しようとしなないのだ。そこに何か大きな秘密が潜んでゐる事は、誰にも想像されるではないか。

筆者は様々な臆説の中から、動かし難い一つの證據を掴んで、イギリス貴族バジル・ザハロフ卿の謎を解いてみたい。

皇后への贈物

一八八〇年頃の事である。

ロシア正教會の若い僧正アンソニーは、にはかに薄れてしまつたアレキサンドラ皇后の寵愛を氣に病んで、僧院の奥まつた一室に憂鬱な日を過してゐた。

スラリとした長身、ブロードの房々とした髪、炯々と輝やく美しい眼、そしてまだやつと三十を出たばかりの若い眉目秀麗なアンソニー僧正は、ロマノフ宮廷に出入する貴婦人達の人氣を一身に集めてゐたものだ。それがどうした事か、突然氣紛れな皇后の御機嫌を損じて、宮廷への出入りを禁じられてしまつたのだ。

『僧正、何をふさぎ込んでゐられますな？』

或る日、ふと彼の室を訪れて問ひかけたのは、皇后附の式部職を勤めてゐる友人のドブレコフである。

『いやなに、あまり退屈だつたので、一寸考へ事を……』

『ハツハ……。おかくしにならんでもいゝでせう。私にはよくわかつてゐるのですよ。どうです。又宮廷の御出入りがかなふやうになる秘策をお授けしませうかな』

『え……？ 何かそんな秘策がありますか？』

僧正は思はず膝をすゝめる。

『ありますとも。ねえ僧正、あなたは陛下が殊の他寶石類をお好みだといふ事を御存じないのですか？』

『それは知つてゐます。私に何か寶石でもお贈りしろといふのですか？』

『左様。あなたのお手近には、いくらでもすばらしい寶石類がある筈ですからな』

『それがある位なら、私はこんなに悩みはしませんよ。いつたい私が何を持つてゐるといふのです？』

『おや……？ あなたがお預りになつてゐる禮拜堂の御神像に、ピカ／＼光つてゐるのは何です？』

『元々ありません、君は私に御神像の寶石を盗めといふのですか？』

僧正が思はずギョツとして眼を輝かすと、式部官はそれを軽く制して笑ふのである。

「ハツハ……。アンソニイ僧正。あなたは陛下を寶石商人か寶石學者だとも思つて居られるのですか。陛下はたゞ寶石類がお好きだといふだけの事ではないですか」

「では、どうしろといふのです？」

「陛下には眞物も偽物もお見分けになる眼力はおありにならない。そこでですよ。美しく輝いてさへ居れば、陛下は必ず眞物だと思ひになる。若し御所望なら、私がさういふ石を捜して来て進ぜようか」

「成程、さうですか。お願いします。是非どうか」

それから二三日経つと、ドブレコフ式部官が美しいエメラルドを、立派な寶石箱に納めて持つて来た。眞物だとしたら、アンソニイ僧正の五年分の給料を棒に振つても、到底手に入りさうにもない立派な石だ。

式部官の手によつて、その妖しく輝く寶石が皇后の御手許に届けられると、たちまちその効果が見れたのか、僧正の許にお召しの使者が送られた。

喜び勇んで僧正が宮廷に参内してみると、殊の他御機嫌うるはしいアレキサンドラ皇后は、そ

の偽エメラルドが餘程お氣に召したとみえて、早くも本物のダイヤモンドに代つて、王冠の眞正面にキラ／＼と輝いてゐる。有難いお言葉までも戴いて、僧正は再び以前に優る寵を獲得したかの如くであつた。

僧正は又、毎日宮廷に召されるやうになつた。が、それはほんの短い幸福にしか過ぎなかつた。彼の宮廷に於ける人氣を妬み憎む者がかなりあつたが、その敵の中に彼の奸策を見破つた者があつたのだ。

僧正は事の露見を感じると、皇后の怒りを受ける前にベテルスブルクから遁れようとした。が、その時は既に遅かつた。僧院の一室で逃亡準備を急いでゐるところへ、早くも追手がかゝつて、彼は僧服のまま獄舎に投ぜられたのである。

僧衣の溺死體

或る夜、獄窓にアンソニイ僧正を訪れる者があつた。それは、平常着にカモフラージュしたドブレコフ式部官であつた。

「僧正。私は君の爲を思つて考へて上げた事なのだが、返つてお氣の毒な事になつてしまひましたね。これは私があなたに上げる最後の贈物です。受けて下さい」

獄中では到底得難い白パンである。然し、それがたゞの白パンでない事は、式部官の意味深長なウキンクで察せられた。式部官はなほ言葉を繼いで、

「それから僧正、監獄の中にも敬虔な信者が相當にゐる事でせうから、君はきつと不自由はなさらんでせうね。君の幸運を祈りますよ」

といひ残して去つて行つた。

果せる哉、式部官が去つてから、そつと白パンを割つてみると、中に一挺のピストルが藏されてあつた。式部官としては、僧正が法廷に立つて總てを自白するやうな事になると、自分の首も危くなると思つたので、彼をこつそり脱走させようとしたのである。

それから間もなく、式部官の残して行つた第二の謎が現はれた。獄中の敬虔な信者？ が、深夜に乗じてこつそりと彼の獨房に忍び寄つて來たのである。

「僧正様、どうぞこちらへ……」

一人の看守が小聲でさゝやいて、彼を獨房から誘ひ出した。

監獄の廊下は深閑と静まり返つてゐた。僧正はピストルを固く握りしめた片手を、僧衣の袖の下にかくして、足音を忍ばせ乍ら看守の後に續いた。

月のない眞つ暗な夜だつた。廣い庭を横切つて、城壁のやうに高く聳えた塀の下までたどり着くと、前以つて看守が用意して置いたらしい繩が、塀の頂上から垂れ下つてゐる。

「僧正様、私の爲にどうか神のお許しをお祈り下さい」

看守は聲をふるはせて、彼の足下に膝まづいた。その頃のロシアには、正教會の盲信者がとても多かつた。その看守も盲信者の一人だつたのであらう。僧正が彼の頭の上に手を置いて、

「神の善良なる僕の上に榮光を垂れさせ給へ？」

と小聲で祈つてやると、看守は嬉しさうに僧正の手の甲に接吻して、

「さア、僧正様、早くお逃げ下さい。あなた様の御無事をお祈り申します」

「有難う」

僧正は一本の繩を頼りに、高い石塀を登つて、やうやく獄舎を遁れ出る事に成功した。だが、それから小一丁許り離れた時、突然、

「誰だツ！」

と闇の中から呼びかける者がある。ハツとして振り返り様、早くも僧正の手のピストルが火を吹いてゐた。

「ム……ッ！」

一聲無気味な唸めき聲を上げて、撞とばかり倒れ伏したのは、外廓の巡視に廻つてゐた一人の看守だつた。

それから幾日かの後、ベテルスブルクを横切つて流れるネヴァ河に、正教會の僧正の僧衣を纏つた溺死體が浮き上つた。死體は既に腐爛してゐて、はつきり何者とも判別し難いやうになつてゐたが、着衣から脱獄したアンソニイ僧正に違ひないといふ断定が下されたのである。監獄の外廓巡視に廻つてゐた看守が一人行衛不明になつた事は、そのまゝ不問になつてしまつた。

ヨット上の會見

話はそれからずつと飛んで、二十何年後の一九〇六年に移る。

既にヨーロッパの千萬長者、イギリス貴族に成上つてゐたバジル・ザハロフが、彼の所有する

豪華なヨットで大西洋を乗り切り、アメリカ大陸を訪問した事がある。もう六十に近い老人であるが、短かく刈り込んだ白い口髭、威嚴のある三角形の額髭を生やした彼の風貌は、實に堂々たる貴族ぶりだつた。彼が秘書役を従へて紐育港頭に上陸すると、アメリカ朝野の社交人達は我先にと歓迎の手をさしのべるのである。

彼は一日二日をウオール街の金融資本家連の訪問攻めに過すと、早速首都ワシントンに出かけて行つて、當時の大統領ローズヴェルトに謁見した。彼はフランス政府の信任状を携へて、パナマ運河協商の臨時代理役の資格で、アメリカ政府と話し合ふ用向きを持つてゐたのである。

ワシントンの用事を済ませて、再び紐育に歸つて來ると、彼は連日連夜豪華版のレセツプションに攻め立てられ、アンドリユー・カーネギー、W.E.D ストックス、ジョーン・ビゲロー、ハドソン・マキシム、マーク・トウエーンなど、財界、社交界、文學界などの大立物と會見したりした。

恰度その頃、ロシアの文豪マキシム・ゴルキー——最近のニュースでソ聯の反革命分子に毒殺されたといふあのゴルキーだ——が、ロシア文學をアメリカに紹介するといふ用向きで、大陸に來てゐた。ところが、彼は彼の妻でない貴婦人を同伴してゐた事が、アメリカ社交界の爪弾

きを受け 危く追放されかゝつてゐた。それを耳にしたザハロフは自からその渦中に入り込んで、ゴルキーを追放から救つてやつたものである。

そんな縁故から、彼はゴルキーと親しく語る機会を掴んだ。と、或る日の事、ゴルキーが彼に訊ねた。

『あなたは紐育にゐるドブレコフといふロシア人を御存じないですか？』

『ドブレコフ……？ はてね？』

ザハロフの老いたりとはいへ秀麗な眉が、ピリ、と動いた。

『どういふ人物ですか？』

『商人ですが、なか／＼の才人でしてね、ロシアにゐた頃には、チエーホフだの、リムスキー・コルサコフなども交際があつたらしい。こちらでもピゲローだのマーク・トウェインなどと、相當親しくつきあつてゐるやうです』

『ホホウ。やはりロシアにゐた頃にも實業家だつたのでせうか？』

『いゝや、宮廷に出入りしてゐたらしいですよ。何か事情があつたらしく、今ではアメリカ人に歸化してゐるのですが』

『成程、或はロシアで會つた事があるかもしれませんが。さういふ人だつたら、一度會つてみてもいゝですね』

ふとそんな事を漏らしたのが因で、ザハロフはドブレコフを食事に招かなければならない破目になつた。

彼は市内の料理店だのホテルだのを避けて、港上に浮ぶ自分のヨットをドブレコフとの會見場にした。

ザハロフの招待状を受取つたドブレコフは、あまりに意外な招きにむしろ無氣味になつた。無論、彼とてもザハロフの前身が何者であるかは知らない。が、ヨーロッパの財界、政界に、飛ぶ鳥を落とすやうな潜勢力を持つ男から、意外な招待を受けるのには、何か計略が潜んでゐるのではあるまいか。彼とても脛に傷持つ身體である。といつて折角の招待を断るわけにも行かないが、萬一、ロシアの探偵でもヨットに乗り込んでゐて、そのまゝ自分を捕縛するやうな事があつたら、最後まで戦つてやるやうなつもりで、彼はそつと一挺のピストルをポケットに忍ばせ、屈強な友人に腕をとらせてザハロフのヨットに乗り込んで行く事にした。

闇夜の港上に白波を切つて進むモーター・ボートに腰をかけた乍らも、ドブレコフは戦々兢兢々た

るものだった。瀟洒たる白塗りのヨットの舷梯にボートが横着けされる。彼は腕をとる屈強な友人——恐らくギヤングの一人であらう——に、意味深長な目配せをし乍ら、舷梯をトン／＼と上つて行つた。

豪奢を極めたサロンには、美しいシャンデリヤから煌々たる光があふれてゐる。

『いよう、ドブレコフ君、しばらくでしたなア』

白梅の瀟洒たる老紳士が、親しげに彼の前に右手をさしのべた。その顔は正しく新聞紙上で幾度か見た事のあるザハロフに違ひない。彼は『しばらくでしたなア』といふ言葉を一層意外に思ひ乍ら、恐る／＼右手を出して握手した。そして、ちつと老紳士の顔に見入つた瞬間、

『アツ……！』

と思はず驚きの嘆息を漏らさないうではゐられなかつた。

『あなたはアンソニー僧正……』

といひかけるのを、ザハロフが素早くさへぎつた。

『いや、君がこんなところにゐられようとは思はなかつた。實に奇遇ですなア。アツハツハ……』

永遠の謎

ドブレコフの同伴者は直ちにモーター・ボートでヨットから退けられ、彼はザハロフと二人きり膝を交へて懷舊談に耽つた事である。二人きりの話は永遠の謎として、誰にも聞かれたくない事だつたに違ひない。

別れ際にザハロフはドブレコフと最後の握手を交はし乍らいつた。

『ねえ君、君は随分迷惑さうに私の招待に應じたらしいが、そんな事はちつとも恐れるには足らんですよ。若しロシア皇帝から、君を亡命者として送還するやうに要求することがあつても、絶對に拒絶して貰ふやうに、私からローズヴェルト大統領に頼んで置いて上げよう。君は僕にとつて命の恩人なんですからなア。まあ安心して合衆國に腰を落着けなさるがよい』

ザハロフはその翌朝紐育を出發して、ヨーロッパへ歸つて行つた。

ドブレコフはその後母國から送還を要求される事もなかつたばかりか、世界大戦中にはその恐

れてゐた母國の代表者に任ぜられ、重要な特務機關を勤めてゐたといふ事だ。

彼は今日も猶ほ健在で、紐育に住んでゐるといふ話である。無論、此處に用ひたドブレコフといふ名は假名なのだ。

バジル・ザハロフが雨の如くに降りかゝる臆説に對して、八十歳の生涯中、一度として自から釋明を行はず、冷たい沈黙の苦笑のうちに聞き流してゐたいはれは、此の暗い謎の中に秘められてゐるのではなかつたか。

もう一つ奇怪な事には、アンソニー僧正の脱獄後調べたところに依ると、彼の主管してゐた寺院の聖像から、大きなエメラルドが一個行方不明になつてゐたさうだ。これこそはまぎれもない眞物のエメラルドなのだが、それを果して僧正が持つて逃げたものか、或はドブレコフなる怪人物が盗み取つたものか、恐らくヨツト上の秘語の中では、そんな話が交はされたのではなからうか。

妻に賣られた陸相

異色賣國奴事件

賣國奴——あゝ、なんと不愉快な、いまはしい響きを持った名前だらう。出来る事なら世界中の辭書から、こんな言葉は抹殺してしまひたい。だが、悲しむべき事には、地球上に戦雲が捲き起つて来ると、必ずつきものゝやうに此の賣國奴事件といふのが持上つて来るのだ。

前の歐洲大戰の時にも、それはかなり澤山あつた。が、その中でも最も異色のある、驚くべき二大賣國奴事件がある。その一つは開戦直前オーストリア・ハンガリー帝國の師團參謀長で、その前には諜報部長の職にあつたアルフレッド・レッツドルといふ大佐が、對ロシア開進計畫の全部を當の假想敵國たるロシアに賣つてゐたといふ事件である。彼は遂に自分の手で養成した防諜警察の手によつて捕へられ、自からピストルで自分の生命を斷つたのであつた。敵國をスパイし、敵國のスパイを防ぐ職にあつた親玉が、自から敵國のスパイになつてゐたなんていふ話は、さうザラにあるものではない。

それからもう一つの事件といふのは、一國の陸軍の總本締めである陸軍大臣が、敵國のスパイになつてゐたといふ、お話にならないやうな話である。なんとあきれ返つた事ではないか。そのあきれ返つた話の主といふのは、歐洲大戰の初期の頃ロシア帝國の陸相に就任してゐたソホムリノフ將軍である。

前のレッツドル大佐の場合もさうであるが、此のソホムリノフといふ將軍も、極めて低い地位から自分の腕一本で叩き上げ、遂に軍の最高位までかち得た立志傳中の人物なのだ。そんな立派な手腕と頭腦とを持ち乍ら、どうして非常識極まる破廉恥を敢てするやうになつたのか？ 無論、彼等の性格的缺陷もあつたらうが、當時のオーストリア・ハンガリーなり、ロシア帝國なりの社會狀況にも一半の罪はあるやうだ。

何故かといふと、封建的な遺習から脱しきれないでゐた彼等の故國では、當時門閥もなく財産もない布衣から成上つて、軍部の高官の地位を占め、それ相應の生活形式を整へて行くのには、到底正當な職務から受ける報酬だけでは、その威嚴が保たれなかつたのである。

軍部の高官といへば、宮廷を中心とした頗を派手な、所謂貴族社會の交際をして行かなければならない。レッツドル大佐はその無理がたゞつて、巨額の負債に追ひまわられてゐる際に、ロシア

の諜報網の誘惑を受けてしまったのだし、ソボムリノフ陸相の方は、若い美人の妻君の虚栄心を満足させたいばかりに、知らず／＼のうちに敵國ドイツからも報酬を貰ふやうになつてしまつたのだ。

世の中は金と女が敵なり——といふ歌がある。ソボムリノフ陸軍大臣の場合は、實にその通りだ。折角努力して築き上げた地位を、金と女との爲に滅茶苦茶にしてしまつたばかりでなく、可哀さうに自からの命までも縮めてしまつたのである。

先づ話はその妻君との戀愛事件から書き起して、賣國陸相の行状を展開して行く事にしやう。

農學校教師の妻

ソボムリノフがまだキエフ軍管區司令官だつた頃の事である。或る宴會の席上で、彼は一人のすばらしい美人を發見した。

「おい君、あすこにゐる婦人を知つてゐるかね？」

彼は隣席にゐた副官を肘でつゝいた。

「あれですか。農學校の教師の妻君ですよ」

副官は半ば嘲るやうな口調で答へた。すると、もう一方の隣席にゐた將校が、早くも此の會話を小耳に挟んで、話の仲間入りをして來た。

「え……？ 農學校の教師の妻君だつて？ それには勿體ない美人ぢやないですか」

「うむ、全く。惜しいもんだ」

「どうです、閣下。今夜踊の相手をしておやりになつては？ きつと光榮に感じますぜ」

此の將校はセルゲイ・ミアソエドフといふ大佐で、キエフ軍管區に屬する國境警備軍の司令官である。軍人にして置くのは惜しいやうな才物で、上司に取る社交術には殊の他長じてゐた。食事が終つてダンスが始まると、彼は早速席を立つて農學校教師夫妻の席へ出かけて行つた。無論、一面識もない教師のだが、彼は馴れ／＼しく話しかけるのである。

「先生、司令官閣下が君の奥さんと踊りたいといふ御所望だが、如何ですな？」

すると教師がそれに答へる前に、妻君の方が膝をのり出した。

「まア、光榮でございますわ。司令官閣下のお相手ができるなんて……」

「では、御一緒にどうぞ」

ミアソエドフは教師がいゝとも悪いともいはないうちに、もう妻君を促して席を立たせ、ソホムリノフの方へ伴れて行く。

「閣下、友人の令夫人ですが、是非お相手を願ひたいさうで」

「さうですか。これはく……」

ソホムリノフは一寸テレながらも、嬉しさうに席を立てて教師夫人と腕を組み、踊りの渦の中に捲き込まれて行つた。その後姿を見やつて、ミアソエドフはニヤリと快心の微笑を浮べるのである。

皇帝勅任の軍管區司令官といへば、その地方の最高位を占める勢力者であり、社交界でも最も華やかな人氣の焦點でもある。農學校の教師風情の妻君が、その踊の相手に選ばれたのだから、光榮此の上もない事に違ひない。教師夫人は有頂天になつてしまつた。

悪い事には、ソホムリノフはその以前に妻に先立たれて、當時は獨身のやもめ暮しだつた。で、此の一夜の宴以來、教師夫人の姿が嘘の奥に泌み込んでしまつた。そこへもつて来て、上司の心を讀むのに妙を得たミアソエドフが、彼に取り入らうとして油をかけたのである。

「どうですか、閣下。あの教師の夫人は閣下にかなりお思召しがあるやうですが、一層の事結婚

してしまはれては？」

「冗談ぢやない。君は何といふ事をいふのだ。彼女はレツキとした他人の妻君ぢやないか」

「それはさうですが、閣下の地位を以つてすれば、どうにでもなる事ぢやないですか」

「いや、さうは行かんさ。第一、教會の許可が下りやせんよ」

當時のロシアでは宗教の勢力が大變なものだつた。或る場合には皇帝の權威を以つてしても、正教會の規定を曲げる事ができなかつた程絶對的なもので、しかもロシア正教では離婚が嚴禁されてゐたのである。従つて人妻である教師夫人と結婚するには、夫である教師の死後でなければ許されない。

だが、ミアソエドフはせゝら笑ふやうな口ぶりで、ソホムリノフの言葉をさへぎつた。

「なアに、閣下にさへそのお思召しがおありなら、そんな事はわけない事です。いくらでも方法がありますとも」

「ふうむ、それはどういふ方法だね？」

「これはふとした思ひつきにしか過ぎませんが、あの農學校の先生を外國視察といふ名目で、國外に出してしまふのです。その間に夫が行方不明になつた事にして、離婚手続きをとるといふ

のはどうでせう？」

「そんな事が出来るものだらうか？」

「まあ私に委せて置いてごらんなさい。悪いやうにはしませんから」

こんな話があつてから間もなく、農學校教師は縣知事からの發令で、外國へ農事視察の出張を命ぜられたのである。何も知らない教師は大變な出世でもしたやうに喜び勇んで、故國から旅立つて行つた。

ミアソエドフの書いた芝居は美事に成功した。厳格な教會の掟のぬけ道をくゞつて、教師夫人は離婚手続きをすませ、農學校教師が再び故國に歸つて來た時には、彼の妻はもう到底手の届かない高官の軍管區司令官夫人に納り返つてゐたのである。

ソホムリノフは此の没義道極まる結婚が、聽ては自分の生涯を陥れる陥穽にならうとは夢にも思つてゐなかつたであらう。

國境を越えて來る餘德

名もなき農學校教師の妻君から、一躍軍管區司令官夫人に成上つたソホムリノフ夫人は、すっかり得意になつてしまつた。教育家の妻君であり乍ら、名譽慾の爲にはそんな非道をも敢てする程の女の事だから、大變な野心家で虚榮の強い女であつた事はいふまでもない。

一方ソホムリノフの方でも、既に頭に霜を置くやうな年輩になつて、若い美人の妻君を手に入れたのだから、嬉しくてたまらなかつたらしい。彼女を喜ばせる爲ならば、多少社會的に不都合が起つても構はないといふ程の身の入れ方だつた。

「ねえあなた、今迄とは違つてあなたの奥さんになつた以上は、こんな田舎出來の着物なんか着てはゐられませんわ。それに首飾りだつて指輪だつて、上流の社交界につけて行かれるやうな物は何一つ持つてゐないんですもの。第一、あなたの恥になるぢやありませんか？」

「それもさうだね。ぢや今度ペテルスブルグへ行つた時買つて來るがいゝさ」

「まあ、ペテルスブルグですつて？ あなたはペテロスブルグにどんな物があるとと思ひるなるの？ 世界の流行がペテルスブルグから生れると思つてらつしやるんですか？」

「それぢやどうすればいゝのだね？」

「私、パリへ行つて來たいと思ひますの。ねえ、いゝでせう」

若い妻君に鼻を鳴らされると、ソホムリノフは首を横に振る事ができなかつた。彼女は早速相當な大金を握つてパリへ旅立つて行つたのである。

國境に近いウイルバーレンの驛に彼女を乗せた列車が止ると、國境警備軍司令官としてそこに駐在してゐるミアソエドフが、待ち構へてゐたやうにその列車に乗り込んで來た。無論、出發前に打合せが出來てゐたのである。幾日かの後にパリから歸つて來たソホムリノフ夫人の首には、美事な眞珠の首飾りが妖魔のやうに輝き渡り、指には大きなダイヤが燦然として光つてゐた。

『おい、どうしたのだ？ そんな贅澤な物を買ひ込んで來て？』

流石のソホムリノフも晒然として目を見張つてしまつた。

『ねえ、これでやうやくあなたの奥さんとして恥かしくなくなつたでせう？』

夫人は平氣な顔をして笑つて見せる。

『だが、どうしてお前、そんな金を持つてゐたのだ？ 俺が渡してやつた金だけで足りる筈がないと思ふがねえ』

『ミアソエドフ大佐が立替へて下さつたのよ。オテル・ルーブルの一等室に泊つた滞在費も、みんなあの方が立替へて下さいましたのよ』

『え……？ ミアソエドフが……？』

彼よりも遙かに少い報酬しか取つてゐないミアソエドフに、どうしてそんな餘裕があつたのだらう？ 彼は不思議に思はざるを得なかつた。彼は早速ミアソエドフをキエフに呼び寄せる事にした。

『家内が大分君の厄介になつたさうだね。然し、あんな贅澤な物を買はれちや困るよ、君。立替へてくれたのは有難いが、僕にはなかく拂へはしないぜ』

ソホムリノフが當惑さうにいふのを聞くと、ミアソエドフはニヤリと微笑を湛えて、
『なアに、閣下。あれはあなた方の御結婚をお祝ひする爲に、私が贈物として差上げたのですから……』

『え……？ 君の贈物……？ そんな事をして貰つていゝのだらうか？』

『いや、どうか御心配なく』

ソホムリノフは彼にどうしてそんな餘裕があるのか訊いてみたかつたが、その時には何となくいひ出しにくかつた。すると、それから間もなく、パリの社交界の花形連が、續々とソホムリノフ夫人の客としてキエフ見物に押寄せて來た。贅澤な客人達をもてなす豪華な夜宴が、毎夜のや

うにキエフの町の人々を驚かせた。

ソホムリノフは気が気ではない。

「おい、こんな事をしてゐて、後はいつたいどうなるのだね？」

彼は或る夜、あまりの事に夫人に訊ねてみた。

「だつて、私がバリにゐた時には、あの方達に招かれておもてなしを受けたんですから、仕方がないぢやありませんか？」

「だがお前、僕にはそんな贅澤の許される富はないのだよ」

「どうか御心配なく。ミアソエドフ大佐が全部計らつて置いて下さるさうですから」

「え……？ ミアソエドフが……？」

ソホムリノフは又目を丸くした。

その翌日、彼はミアソエドフを呼び寄せて、遂にどうしてそんな餘裕が彼にあるのかを、短刀直入に質問したものである。

「閣下。私は國境警備の職にある關係上、さういふ點は非常に恵まれとるのです」

ミアソエドフは平然としていふ。

「國境警備の職にある關係上だつて？ それはどういふわけかね？」

「閣下、此の餘徳は私一人でふところにするべきではないと思ひます。あなたに直接差上げて、萬一拒絶されるやうな事があつてはいけないと思つて、私は奥さんにお盡ししてゐる次第なのです」

「おい君、もつとはつきりいつてくれ給へ。いつたいその餘徳といふのは、何處から入つて來るのだね？」

「國境を越えて入つて來るのです」

「え……？ すると、ドイツからかね？」

「まあ何處でもいふぢやないですか。なアに、あなたさへ含んでゐて下されは、絶対に他に漏れる心配はありません。國境を固めてゐるのが私で、此の地方を統制してゐられるのがあなたです。今後も御入用の時は何時でもお申付け下さい」

「……………」

ソホムリノフは啞然として相手の顔を見守つた。だが、ミアソエドフは平然として微笑さへ湛えてゐる。ソホムリノフは何もいふ事ができなかつた。此の對戦は完全にソホムリノフの敗戦に

終つた。

彼はその日から假想敵國の金と知り乍ら、愛妻の虚榮を満足させる費用を、ミアソエドフからあほぐやうになつたのである。

陸相の苦衷

暗澹たる歐洲の戦雲を前にして、ソホムリノフ將軍はキエフからペテルスブルクに召還され、陸軍大臣の榮職に就く事になつた。政治家連の間にはかなり反對する者もあつたが、軍部では彼の陸相就任を絶對的に支持した程、彼の手腕は認められてゐたのである。

その頃ミアソエドフは、禁制品を秘密に國境通過を計つてゐた事が曝露し、疑獄事件を引起し、さうな形勢にまでなつて、國境警備司令官の任を解かれてゐたのだが、ソホムリノフは陸相就任と共に彼を大臣秘書官に採用し、陸軍省勤務を命じたのである。疑獄事件の主人公を大臣秘書官に任命するなどは、随分亂暴な人事移動ではあるが、當時の官制では陸相の自由意志にまかされてゐたのである。その頃ではミアソエドフは、ソホムリノフにとつて公私共に缺くべからざる

相棒となつてゐたのだつた。

果せる哉、此の人事移動は政治家連の間で批難の的となつたが、ミアソエドフの疑獄事件には確たる證據が上らなかつたので、議會の問題になつた程度で済んでしまつた。十月黨の領袖で軍事上の専門家である愛國家グーチコフは、それに憤慨してミアソエドフを祖國を裏切るドイツ密偵として告發した。

ミアソエドフは當然名譽毀損で訴へなければならぬところである。だが、法廷で争ふ事になると、親分ソホムリノフを失脚させる恐れがあるので、彼はグーチコフに決闘を申込んで自己の潔白を證明しやうとした。彼はグーチコフがピストルの名手である事を知らなかつたのだ。

二人はペテルスブルグ郊外の森の中で、ピストルを構へて相對した。ミアソエドフはきつぱり相手を狙つて引金を引いたのだが、彼の腕が未熟だつたのか、その彈丸はグーチコフの肩先をかすつただけで外れてしまつた。ところがグーチコフの方では、ピストルを空に向けて發射し、ミアソエドフを狙はなかつたのである。

後でグーチコフの友人達が意外に思つてその理由を訊ねた。すると彼は吐き出すやうに答へた。

『俺はあんな野郎を俺のピストルで射ちたくはない。あいつは絞首臺で殺されるべき人間ぢやないか』

そんな形勢がソホムリノフに感じられない筈はない。彼は砂上の樓閣に立つてゐる自分を感じると一日も安閑としてはゐられなかつた。その不安さうなソホムリノフに反して、ミアソエドフの方は平氣なものである。

『閣下、心配する事はありませんよ。方法はいくらでもあるではないですか』

『いつたいどうすればいいといふのだ？ その方法を教へてくれ給へ』

『裏面工作ですよ。あなたには若い美しい奥さんがあるぢやないですか』

『妻に何をさせるといふのだ？』

『社交界で暗躍をおさせになるのです』

『だが、それが此の際どれ程の効果があるだらう？』

『ありますとも、閣下はムジーク（百姓）の權勢を御存知ないのですか？』

『ムジーク……？』

『さうです。あなたの奥さんならムジークを虜にする事はわけはありません。あいつを味方につ

けてさへ置けば、何も心配する事はないぢやないですか』

『成程、さうか』

ムジーク（百姓）といふのは、當時宮廷に隠然たる勢力を据えて、宰相の任免にさへ口を出してゐた妖僧ラスプーチンの渾名である。昨日までは無冠の一野人に過ぎなかつた男でも、彼の知遇を得たばかりに、一躍一國の宰相にもなれやうといふ有様だつた。

ソホムリノフ夫人がラスプーチン邸へ出入りし出したのは、その頃からの事である。

妖僧ラスプーチン

話は一寸傍道に外れるが、此處で一寸ラスプーチンの話を書いて置かなければならない。帝政ロシア没落の衰史に重大な一役を買つたグレゴリー・エフィモウキツチ・ラスプーチンの名前は、諸君も既に幾度か耳にしてゐる事であらう。

彼はトボリスク縣チュメンスキー郡ボクロフスキー村生れの百姓上りで、少年時代から手のつけられない不良だつたので、修道院にぶち込まれてしまつたのだが、それが彼の出世の緒をつ

くつたのだから、人間の運などといふものは不思議なものだ。彼は修道院生活をしてゐるうちに、自分が一種の靈媒的素質を持つてゐる事を發見し、千里眼的透視術——まあ催眠術みたいな妖術を會得してしまつたのである。そして修道院を脱走してその妖術を賣物に浮浪僧となり、各地を放浪してゐるうちに、ふとした事から二十年近くも王宮に侍へて、アレキサンドラ皇后に絶對的な信任を博するウイルボア夫人を、彼の狂信者に捉へてしまつた。

皇帝ニコライ二世は頗る氣の弱いお人好しで、氣性の勝つた野心家のアレキサンドラ皇后には、兎角頭が上らなかつた。下世話でいふ女天下の御夫婦だつたのである。その皇后が顧問格みたいに重用してゐるウイルボア夫人を、狂信者に捕へてからのラスプーチンは、文字通り旭日昇天の勢ひで宮廷内に勢力を盛り上げてしまつたのだ。ウイルボア夫人を通じて皇后をも狂信者に獲得し、病弱な皇太子の健康はラスプーチンの祈願によつて保たれてゐるとさへ信じさせてしまつた。

政變がある毎に皇帝は後任者の選定を皇后に相談される。すると皇后は顧問格のウイルボア夫人に相談する。

『陛下、ラスプーチン僧正をお召しになつて、占はせて御覽遊ばしませ』

といふ事になる。ところがラスプーチンの妖術などといふものは、随分いゝ加減なものだから、彼の邸に日参をして御機嫌伺ひをする夫人連の亭主で、自分に都合のよささうな男をまことしやかに推薦する。それが又逆コースをたどつて皇帝の耳に入り、勅令となつて親任式が擧げられるといふ有様だ。

で、ラスプーチンの邸宅では毎夜のやうに亂脈極まる宴會が催され、野心家の夫人連が姪を競つて馳せ集り、彼の御機嫌をとり結ぶのだ。中には夫を出世させたさに、こつそりかくれてラスプーチン詣でをしてゐたのが、遂に僧正様のお眼鏡にとまつて夜を明かさなければならぬ破目に陥り、翌朝その亭主がピストルを握つてラスプーチン邸に押しかけたなんていふ事件を醸した事もあつたが、そんな事に懲りるやうな僧正様ではない。

彼の邸に集る夫人連が、總てさういふ策略を抱いて信者を装ふ者ばかりかといふと、決してさうではない。多くの者は實際に此の百姓上りの妖術僧に魅せられて、前後のわきまもなく通ひ續ける女だつたのだ。頭には幾日も手入れをした事のないやうな髪の毛が、蓬々と延び放題にからみ合ひ、顔一面に覆つた漆黒の鬚、ニユツと突出した大きな鼻、テラ／＼と光つたの獸のやうな唇、何處をとつても所謂「女にもてる」要素などはないやうな、凡そむさぐるしい風采な

のだが、不思議な輝きを持った爛々たる青い眼でチツと見据えられると、何か反抗し難い壓迫を感じて居るらしい。そこに女心を捕へる神秘がひそんでゐたのかもしれない。

だが、たつた一人だけ彼をあくまでも信ぜず、彼を輕蔑して冷嘲を浴せてゐる高貴の姫君があつた。皇室では皇后をはじめ、皇太子、皇女方までも彼の信者だつたのだが、たつた一人長女のオルガ姫だけは、不作法なムジークが現れると姿をかくしてしまふのだ。

ところがそのオルガ姫に、彼は最大の興味を抱いてしまつたのだ。ラスプーチンに限らず、その邊にゐるブルジョア親爺にも、よくさうした傾向は認められる。いくらでも金になびく女がゐるにも拘らず、振つて振つて振りまくる女を追つかけ廻して、何とかモノにしやうといふ天邪鬼だ。それが人間共通の征服慾といふのかもしれない。

誕生宴の收獲

歐洲大戰が開始されてから間もない一九一五年、一月の二十一日の事である。

首都ペトログラード（對獨逸戰と共にベテルスブルグはロシア讀みにペトログラードと改稱さ

れた）のゴロホワヤ街六十一番のラスプーチン邸では、晝間から彼の誕生宴が盛大に催されてゐた。夜に入つて主客の間に酔ひが廻つて來ると、男の客は何時の間にか二人三人と姿を消し、後に残るのは此の家のあるじを取巻く婦人客ばかりになつてしまつた。

「僧正様、今あなたが一番深い興味をお持ちになつてらつしやる婦人は、いつたい誰方ですの？」
突然一人の酔つた婦人客がこんな質問を發した。と、その瞬間、他の婦人客達の騒然たるさわめきが、水を打つたやうにシーンとした。彼女達はラスプーチンがどんな返辭をするかに、異常な興味をひかれたらしい。

「何だど？ 俺が誰に一番興味を感じてゐるかつて？ アツハツハ……、誰だと思ふ？」
彼は不作法な笑ひを飛ばして、女達を見廻はす。

「さア、誰でせうね？」
僧正様があきつと自分の名前を擧げるに違ひないといふ自信を潜めて、わざとらしく反問する女もある。

「聞きたけりやいつてやるさ。オルガだよ」
「オルガ……？」

婦人客達はそこに集つた女の中に、誰かオルガといふ名前を持つた者がゐるのかと思つて、互に猜疑深い瞳を見交はした。その様子を見ると彼は、

「ウツハツハ……」

と大聲に嘲笑を浴せてから、

「自惚の強い奴等だ。此處に集つてゐる奴等になんか、俺は興味を持つとりやせん。俺のいふオ

ルガは、お前等みたいな賤しい女共ぢやないんだ」

中には何々侯爵夫人もゐれば、伯爵夫人もゐる。それを野良犬のやうに扱ふのだから、彼女等はしたゝか誇りを傷けられて、すつかり座が白けてしまつた。

「まあ、それではオルガ姫様の事を仰しやるのですか？」

わざとらしく驚いた様子をして問ひ返したのは、婦人客の中に混つてゐたソホムリノフ夫人である。

「きまつとる。やつとわかつたのか」

「まあ、それではどうして今夜の御祝宴に、オルガ姫様をお招きにならなかつたのです？」

「何……？ 何故オルガを今夜招ばなかつたかつて……？ そんな事はどうでもいい」

「僧正様はきつとお振られになつたのよ、ハツハ……」

酔つた紛れにこんな事をいつて、彼をからかふ女があつた。と、彼は憤然としてソファから起直つた。

「バカをぬかせ！ 俺が振られるなんて、そ……そんな事があるか。お前達はオルガが俺の邸には來まいと思つてるんだな？」

「勿論ですわ。やんどとないお方ですもの」

「よし。今夜はもう遅いからいかんが、そのうちにきくとお前達のゐる前にオルガを招んでみせてやる。俺には何だつて不可能といふ事はないんだぞ！」

彼は怒號するやうにいつて、顔を粗野な態度でウオトカの杯をグイとあほると、不機嫌さうに叫ぶのである。

「おいこら、女共！ 踊れく！ ジブシー達は何をしとるのか」

隅の方に待機してゐた賤しいジブシーの女達が、タンバリンとバラライカをかき鳴らして唱ひ乍ら、下等な踊りを踊り出した。さうして無禮講の亂痴氣騒ぎが、しらくと空が白みかける頃まで續くのである。

翌朝、陸軍大臣官邸の奥まった一室で、ソホムリノフ將軍とミアソエドフとが、額を寄せ合つてひそ／＼と語り合つてゐた。

『今朝もその催促があつたのですよ。あなたにわからん筈はないと、先方ではいふのですが……』
『だから、此處當分は到底攻勢には出られんと答へとけばいいだらう。それ以上の事は儂にもわからん。何しろ氣紛れな皇帝の事だからなあ』

『何とかして皇帝の御意向を確める事はできんものでせうか？』

『それがさ、戦備が遅れとるので、儂は今のところ御不興を被つてゐて、ツアルスコエ・セロ（皇帝の居所）へ伺候できんのでね』

『困りましたなあ。』

ミアソエドフの許にドイツ軍參謀部から、ロシア軍の南露戦線の總攻撃開始時期を通報するやうにと、再三督促が來てゐるのだ。佛軍總司令部では既に準備が整つて、ロシアと相呼應してオーストリアを總攻撃に移る時期を待つてゐるのだが、ロシア軍はなかく腰を上げない。獨逸軍側ではその總攻撃開始を前に、逆に南露方面へ攻め入らうとして、しきりに正確な期日を探らうとしてゐたのだ。

當時のロシアは既に形式だけは憲政君主國になつてゐたが、實質は相變らずニコライ二世の專制君主國に等しい。その皇帝が總司令長官であり、しかも戦線の動きにまで皇后の意志が働くことから、宮廷深く喰ひ入つてゐる者以外には、陸軍大臣といへども戦線の動向を正確につきとめる事はできなかつた。

ソホムリノフが當惑しきつてゐるところへ、漂然と夫人が入つて來た。

『どうした？ ムジークの家で何かいゝ聞き込みでもなかつたかな？』

將軍が何氣なく問ひかけると、

『別に變つた事も……』

といひかけて、夫人は、

『さう／＼、こんな事がありましたのよ。ムジークはオルガ姫に振られてゐるらしいの』
と前夜の出來事を報告する。それを黙つて聞いてゐた將軍は、突然ボンと膝を叩いて席を立つた。

『さうだ、いゝ事を聞いた。ミアソエドフ君、兩三日待つてみてくれ。今度こそ皇帝の意向が確められさうだよ』

賣國團暗躍

ソホムリノフ將軍はそれから間もなく、露佛銀行頭取のルビンシュタインと或るレストランの奥まつた密室で會議した。ルビンシュタインは同銀行の頭取の他、ドン溪谷の大きな炭礦會社の社長だの、數個の保險會社の重役だのを兼ねてゐた猶太人で、ロシア財界の大立物だった。

「ルビンシュタイン君、君は覺えてゐるだらう？ 此の間ヴァイラ・ローデで見た女を。それ、オルガ姫に瓜二つだといつたぢやないか？」

「うむ、覺えてゐるとも。それがどうした？ 君はあの女に思召しでもあるのかね？」

「いや、違ふ。ところで、君はあの女の家を知つてゐるかね？」

「家は知らん。何でもグラソワヤ街邊に住んでゐるらしい。おい、僕が見つけた女をコツソリ掴むつもりぢないのか？」

「違ふ。あの女に急用があるんだ。君にも是非片棒擔いで貰ひたい。大變な儲け仕事なんだ

よ

「儲け仕事……？ そいつは耳寄りだな」

猶太人の本性を發揮して、ルビンシュタインは早速膝をのり出す。

「實は、又ベルリンから新しい指令が來たので、南部戦線の總攻撃開始時期を知り度いのだ。で、あの女を使はうと思つとる」

「ホホウ。南部戦線の總攻撃とあの女と何の關係があるんだね？」

「いや、あの女と直接關係はないが、あの女を贈物にして、百姓を囮に使ひたいのさ。百姓はオルガ姫に振られ乍ら、しかも首つたけなんだよ」

「成程、然し本物のオルガ姫なら兎に角、あの女ぢや百姓は動くまい。いくらあの女がオルガ姫に似てゐるからといつて、始終本物を見つけてゐるあいつの眼は誤魔化せんからね」

「なアに、あいつの眼を誤魔化せんでもいゝのだ。あいつの家に集る女信者共の目さへ誤魔化せれば」

「ホホウ、そりや又、どういふわけで」

「百姓の奴、昨夜、信者共に約束をしたのだよ。オルガ姫を自分の邸に呼び寄せるつてね。とこ

ろがオルガ姫は、あいつを毛蟲のやうに嫌つてゐるさうだから、決してあいつの家には來やせん。それで奴、内心大いに困つとるらしい。あいつとしては、宮廷に於ける自分の威力を見せたいだらうし、約束を果さなければ威信に拘はると思つとるだらうし。そこだよ、こつちのつけめは』

『なる程、そいつは名案だ』

『どうだね、君、百姓に會つてみてくれんかね？』

『よろしい。引受けた』

此の會話で察しられる如く、ルビンシュタインもソホムリノフ一味の賣國團に加はつてゐるのだ。猶太人には祖國といふものがない。彼等の祖國はたゞ金のみだ。

ところが、ラスプーチンは不頼漢に近い男だつたが、祖國愛だけは多少持合はせてゐたので、金の力で彼等の手先には使はれない。殊に彼は金には少しも不自由をしてゐなかつた。皇后の御内帑金の中からも、相當なものが出てゐたらうし、彼の推薦によつて就職した内務大臣から、月々千五百ルーブルの機密費が出てゐたし、朝に晩に就職運動だの請願運動だのに彼の邸を訪れる信者達から、莫大な貢物があつたし、その上、衣裳といつたら極めて粗末な僧衣一枚で事が足り

るといふ生活だつたので、金は餘り過ぎる程だつた。で、彼を動かすには他の手を用ひなければならぬのだ。

皇女に似た賣春婦

ルビンシュタインはその夜、早速料理店ヴィラ・ローデに出かけて行つて、オルガ姫に瓜二ツの賣春婦をみつけると、彼女に相當な金を與へてそこに待機させて置き、その足でゴロホワヤ街のラスプーチン邸へ乗り込んで行つた。

『僧正、私は實に不愉快な噂を耳にして、早速お知らせに上つたのですがなア』

チビリく〜とウオトカの杯をなめてゐたラスプーチンにいひかけると、

『不愉快な噂とは何だ？』

とすぐにひつかゝつて來る。策略も何もない粗野な士百姓の事だから、ルビンシュタインのやうな狸にかゝつてはひとたまりなかつた。

『僧正、あなたはオルガ姫に肘鐵砲を喰つたといふ事ですが、それは本當ですか？』

『バカな！ そ……そんな事があつてたまるもんか。誰がそんな事をいつた？』

『いや、もつぱらの評判ですぞ。昨夜お宅に集つた女共がいひふらしとるらしいのです。僧正はオルガ姫に首つたけだが、姫は僧正を袖にしてゐるのだとね』

『ふさけた奴等だ。俺が女に振られるなんて、そんな事があつてたまるもんか。オルガだらうが何だらうが……』

『さうでせうとも。私はさう思つて早速飛んで來たのです。僧正、これは早速、姫をあなたのお邸へお招きになつて、お親しいところを女共にお見せにならないければいかんですよ。女共は妬んでそんな噂を振り撒いとるんですからな、第一、僧正の威嚴にも關する事ぢやないですか』

『うむ、さうだ。だが……』

ラスプーチンの額がにはかに曇る。ルビンシュタインは早くもそれを見てとつて、

『僧正、然し、やんごとない姫のお運びを願ふ事はさう易々とはいかんでせうな？』

『う……うむ、そこだよ。俺が考へとるのは……』

『いや、お察し申します。』

『なアに、普通の集りに呼ぶのはわけはない。おふくろ（彼は皇后の事をさう呼んでゐるのだ。

皇帝の事は親父といつてゐた）でさへ俺の邸へやつて來るのだ。だが、それぢや意味ないからなア』

『さうですとも。で、どうでせうなア。私にいゝ考へがあるのですが……』

『さう考へ……』

『さうです。その代り僧正、私にもお願ひがあるのですが、それを聞き入れて下されば、お力になりますぜ』

『何だ、お前の頼みといふのは？』

『實は南露のミンスク縣に、大森林の賣物があるのです。そいつを私の關係會社に買はせようかと思つとるのですが、買つてまだ伐採の終らんうちに、あの方面の總攻撃が開始されでもすると、森林は滅茶苦茶になつてしまひます。で、買ふべきか止すべきかに迷つとるのですが、あなたから皇帝に總攻撃開始の時期を伺つてみていたゞけんでせうか？』

『そんな事はわけない事だ。お前の考へるとる事が俺の役に立つやうだつたら、明日にでもツアラスコエ・セロへ行つて、親父に訊いてみてやる。早くその考へとる事をいへ』

ラスプーチンはせき立てる。ルビンシュタインの顔に、ニヤリと得意の微笑が浮んだ。

「僧正、私が此處へオルガ姫を呼び寄せてみませう」

「何……？ お前がオルガを……？」

とラスプーチンは信すべからざる事のやうに嘲笑する。

「まあ、暫くお待ちなさい」

ルビンシュタインは電話室に入つて、ヴィラ・ローデに電話をかけ、例のオルガ姫に瓜二つの賣春婦を呼び出して、大急ぎでやつて来るやうに命じた。間もなく彼女を乗せたトロイカがラスプーチン邸の玄關に横着けになる。彼女は頭からスツボリとシヨールを被つたまゝルビンシュタインに迎へられて、客間の明るいシャンデリアの下に伴はれた。

「僧正、オルガ姫です」

ルビンシュタインが彼女の被つてゐたシヨールをさつとめくると、

「あッ、オルガ……？」

と、ラスプーチンは思はず聲を立て、炯々たる眼を一層大きく見張つた。が、次の瞬間、彼の顔に被はれた顔に、サツト失望の色が浮き上つた。

「なアんだ！ ハッハ……」

と笑つてから、彼はもう一度女の顔をしげしげと見て、

「だが、實によく似てゐる。俺も始めにちよつと見た時にはびつくりしたぞ」

「どうです、僧正。あなたが御覽になつてさへ見違へる程、オルガ姫によく似とるぢやありませんか。これならお邸へ集る女共の眼には、本物の姫としか思はれんでせう？」

「成程、これはいゝ。いゝ女をみつけたもんだ」

ラスプーチンの眼が淫蕩的な笑ひを帯びて來た。彼はツカ／＼と賣春婦の傍に歩み寄つて、いきなり彼女の露はな二の腕をぐつと掴んで、自分の腕の中に

「おいオルガ！ こいつめ、憎くい奴だ」

テラ／＼と光る精力的な唇に熱がこもつて來る。

「では僧正、どうかごゆつくり。例の件はよろしくお願ひしますよ」

ルビンシュタインはさういつてラスプーチン家の客間を辭し去つて行くのだ。

敗退したロシア軍

その翌晩、彼の邸に再び女信者達が呼び集められた。何々侯爵夫人、何々伯爵夫人などの中に混つて、ソホムリノフ將軍夫人が何気なく様子を見てゐた事は勿論だ。

酒が出る、料理が出る、夜が深まると同時に、酒席が次第に亂に及びかけた頃、ラスプーチンは婦人客達のまん中に立つて、粗暴な聲で怒鳴り立てた。

「おい、女共！ お前達は俺の家へオルガが来ないと思つてゐるのか？」

「え、姫君がそんな軽々しい事を……」

隅の方からさう反駁的な聲を出したのはソホムリノフ夫人だ。

「軽々しい事だど？ よし、それぢや見せてやる。ツアルスコエ・セロには俺のいふ事をきかぬ者は一人もないのだぞ。待つてろ！」

ラスプーチンは酔ひの廻つた足を踏みしめ乍ら、意氣揚々と電話室に入つて行つた。

「本當にいらつしやるかしら？」

「いゝえ、いらつしやるもんですか。オルガ姫様は僧正様を嫌つていらつしやるといふ話ですわ」

「でも、あんなに自信たつぷりでいふ位ですもの」

「オルガ姫様とは、とても競争できませんわね」

「本當にいらつしやるかどうか、賭を致しません？」

客間のあつちこつちで、婦人達の妬ましさうなさゝやきが湧き上る。

ほんの十分ばかり経つた頃、彼の玄關に一臺のトロイカが滑り込んだ。ラスプーチンを先に立て、婦人達が好奇の眼を輝やかしつとそれに續く。トロイカからしやなりくと降りて來た女を見ると、婦人客達の間にも異様な動搖が起つた。

「あらッー オルガ姫よ。本當だわ」

ソホムリノフ夫人がそれに裏書きするやうにさゝやいた。

「俺のオルガ、よく來てくれたな」

ラスプーチンはいきなりオルガ姫を腕の中に抱いて、明るい客間へ伴ふのである。

婦人客達の中には、はつきりと失望的な悲愁を浮べてゐる者が幾人かあつた。

「さア、お前達は俺の大切な時間を邪魔するな。早く歸つてくれ！」

ラスブーチンは彼女を抱き乍ら叫ぶ。

婦人客達はゾロ／＼と歸つて行つた。

その翌朝、ラスブーチンがツアルスコエ・セロへ参内した事は勿論である。

彼は王宮内を案内なしに、何處でも勝手に歩き廻る事が許されてゐた。で、いきなり皇帝の御居間に入つて行くと、皇帝は大きなデスクに向つて憂鬱さうに考へ込んでゐる。

「何をそんなに鬱ぎ込んでゐなさるな？ パパーシユカ」

彼は皇帝の頭を撫で乍ら聲をかけた。が、皇帝は相變らず黙つたまゝ、困惑さうなためいきを吐いた

「パパーシユカ。あなたは南路戦線の總攻撃に就いて何か困つて居られるのでせう？」

ラスブーチンが重ねて問ひかけると、皇帝はびつくりしたやうに顔を上げて、

「さうぢや。お前にはわかるのか？ それなら余がどうしたらよいのか教へてくれ。フランス軍の總司令部からは南路の總攻撃を早く決行しろと促して來るのだが、我軍はまだ當分軍備が整は

んのぢや」

「兵士が御入用ならどし／＼徴發なさればよいでせう」

「人間はいくらでもある。ぢやが、その人間に履かせる長靴がない。銃が足らん。その補充がつかまではどうにも動けんぢや」

「それは何時になれば補充できるのです？」

「二ヶ月はかゝらう。その前に總攻撃に入る事はできん」

「止むを得ません。二ヶ月待つより他はないでせう。さうなさるがよい」

ラスブーチンは邸に歸るとすぐルビンシユタインを呼びつけて、此の事を知らせてやつた。

「僧正、感謝します。では早速森林を買収させて、伐採に着手させませう。二ヶ月あれば充分に伐採を終るでせうから」

ルビンシユタインは喜んで歸つて行く。

此の報告が直ちにソホムリノフ將軍へ、ソホムリノフ將軍からミアソエドフ秘書官へとリレーされて、秘密無電がベルリンの空に飛ばされた。

露俄協同の總攻撃は二ヶ月を待つ必要はなかつた。まだロシア軍の靴も銃も補充されないうち

に、オーストリア軍の精銳が攻撃に移つたので、ロシア軍はさんぐの惨敗を喫して後退し、數萬の戦死者と負傷者と捕虜とを敵戦線に遺棄しなければならなかつたのである。

逆間諜の功績

此の敗戦でオーストリア軍に捕虜となつた若いロシアの中尉がある。その姓名は遂に發表されずに終つたが、彼は囚はれの身となつてから、どうしてロシア軍が敗戦しなければならなかつたか？ 自分が捕虜にならなければならなかつたか？ を考へてゐるうちに、ふと大きな疑問にぶち當つた。

「おや……？ 俺達はうつかりすると、國內に根を張る敵の間諜にやられたのではないかな？ 味方の戦線の様子が筒抜けに知られてゐたやうな気がするぞ」

さう思ふと、彼は何とかしてその復讐をしてやらうと決心した。そして彼は獨逸軍司令部に向つて、自分をロシア本國に歸してくれれば、ドイツ軍の間諜として働いてみせるといふ申出をした。此の危険な申出はなか／＼聞入れられなかつたが、彼が口を極めてロシア軍部の腐敗を痛罵

し、あんな國を故國に持つのは恥辱であるから、今では祖國といふ觀念など微塵も持つてゐない事を強調するので、遂にその偽りの懺悔が認められ、ドイツ密偵として故國に歸る事が許されたのである。

然し、ドイツ軍諜報部でも慎重だつた。ロシア國內にはかなり多勢のドイツ人が、間諜として潜入してゐるのであるが、それらの人物の姓名は一切明かされず、専らロシア人であり乍らドイツの諜報機關になつてゐる賣國漢と聯絡を計るやうに、そのリストのみが渡されたのである。

それを一目見た瞬間、彼は危く「あつ」と驚きの聲を發するところだつた。何故ならば彼等の最も尊敬する上司である陸軍大臣、ソホルノフ將軍の姓名がそのリストの中にあつたからだ。

彼はそんなけぶりも少しも見せず、あくまでもドイツ諜報部に忠誠を誓ひ、その指圖に従つてオーストリアからドイツ國內を通過して、デンマークのコツベンハーゲンに脱出し、ストックホルムからバルチック海を横斷してリガに上陸したのである。

丁度その頃、ペトログラードではドイツ密偵のニコラス太公暗殺計畫が曝露し、大變なセンセーションを起してゐる最中だつた。時も時、若い逆間諜を志願した中尉がリガからペトログラードに歸り着いて、參謀本部に賣國間諜網のリストを持ち込んだのである。

「えッ？ 何だつて？ ソホムリノフ陸相が敵の間諜だなんて、そんな事があるものか」

参謀本部は愕然として色をなした。だが、そのリストの中にミアソエドフの名がある事が、彼等の疑惑の種となつて、遂に賣國間諜團は一網打盡に捕はれてしまった。

ソホムリノフは軍法會議の追及に逢つて、一切を自白させられてしまった。彼は老顔にさんくくと涙を流し乍ら陳述した。

「私が此のやうな國賊的所行をしなければならなくなつたのは、若い浪費家の妻を持つたお蔭です。さもなければ、私にはドイツから贈られる巨額の金などは必要がなかつたのですから」

ミアソエドフはその首魁として、絞臺に上らせられる事になつた。十月黨の領袖グーチョフ氏が希望した通りの運命が、彼の前に大手を擴げて立ちはだかつたのである。

ソホムリノフは獄中で病を得たので、死一等を減ぜられて終身刑に處せられたが、それから間もなく獄中に病死してしまつた。

此の事件が發覺したのは、ラスプーチンの誕生宴から僅か三ヶ月ばかり後の、まだ復活祭が終りきらない頃である。此の事件を曝いた若い中尉は、その偉大なる功績を大いに賞讃されたが、まだミアソエドフ一味の殘黨が國內に潜んでゐて、彼に報復手段に出づる恐れがあつたので、遂

にその本名は極秘にされてしまつたのである。

X

X

X

さしも一世を風靡した妖僧ラスプーチンも、その翌年の一九一六年十二月十八日の夜、愛國の志士ドミトリ・パウロヴィツチ太公、ユスポフ公、國會議員ブリシユゲヴィツチ等の密謀に計られて、榮華の夢もはかなく暗殺されてしまつた。その又翌年の一九一七年三月にはボルシエヴィキの革命が勃發し、ニコライ二世皇帝もツアルスコエ・セロの宮殿に幽閉の御身となり、淋しく刑場の露と消えられたのである。

噴火山上の女間諜

友軍將校の娘

パリ市内は何處も彼處も昂奮した群集の合唱する「ラ・マルセイユ」に埋められ、その反響が異様な騒音となつて、いやが上にも市民達の焦燥を深めてゐる。

一九一四年八月三日の朝。

わけでも多忙に沸き返つてゐる出征軍輸送本部の嚴重な受附口で、一人の愛くるしい少女が狂氣したやうに泣き喚き乍ら、當番の若い軍曹に縋りついてゐた。

「ねえ、お願いです。私一人位どうにでもなるぢやありませんか。ねえ、一生のお願いですわ」
「いかん」。今日は此の通り忙しいんだから歸つてくれ。君がなんといつても駄目な事は駄目なんだから」

軍曹は無情に少女を振切らうとする。だが少女は執拗に縋りついて放さうとはしない。

此の不思議な争ひの最中、正面の扉が開いて、せわしげな靴音を立て乍ら、一人の少佐がつか

つかと出て来た。

「おいこら、何をしとるのか？」

「ハッ……」

少佐の鋭い叱咤を浴びて、軍曹はどきまぎし乍ら不動の姿勢をとる。瞬間、少女も不意を打たれて洞ろな瞳を少佐の方に向けた。

「おい、貴様、我々の自動車の仕度はできとるのか？」

「ハア、出来て居ります」

不動の姿勢のまま軍曹が答へた時、少女はいきなり軍曹の傍を離れて、飛鳥のやうに少佐の前へ駆け寄つた。

「お願いです。士官さん。どうか私と一緒に伴って行つて下さいました。ねえ、一生のお願いですわ」

「出征志願かな？」

少佐は怪訝さうに軍曹の方を見る。

「出征志願ではありません。ブラツセル送送つてくれといつてさつきからせがんでるのでありま

す」

「ブラッセル迄……？」

少佐の視線が軍曹から再び少女の上に戻ると、少女は少佐の前に膝間づいて、いきなりその手に縫り乍ら口早にしゃべり立てた。

「士官様、私はベルジュームの軍人の娘ですの。私の父は現役の陸軍大佐です。私は戦争が始まる前に父の所へ歸りたいと思つて、一昨日から停車場に行つて汽車に乗らうとしてゐるんですけど、兵隊さんでいつばいで私のやうな若い女は乗せてくれません。お願いですから、荷物を運ぶトラックの隅でも構ひませんの、私と一緒に乗せてブラッセル迄送つて戴けないでせうか。此の通り旅券もありますわ。警察署の証明書も貰つて来てゐますの。ねえ、お願い申します」

ちつと少女の顔を見詰めてゐた中年者の少佐の瞳に、ちらつと好色さうな微笑が浮き上つた。

「一人位どうかならん事はあるまい。俺の車に割り込ませちやどうだな？」

少佐は軍曹の方にいふ。

「ハア、然し、少佐殿の御乗車は四人詰めになつとりましますから、かなり窮屈だらうと思ひます
が」

「然しなんだらう、スベヤシートを入れれば五人は乗れる筈ぢやないのか？ 見受けたところ小柄な婦人だし、それ程の事もあるまいが」

「ハア、多少の窮屈をお忍び願へれば……」

「まア、嬉しい。それぢや作れて行つて下さいますのね」

少女はいきなり少佐の手の甲に唇を押し當て、感激の情を表はすのだつた。

「いゝですとも。それはお困りだつたでせう。かういふ非常の場合はお互ですよ」

少佐はさういつてから軍曹に、

「で、車は何處にあるんだ？」

「門内にお待ちして居ります」

「さうか、よろしい。貴様、早くあつちへ行つて他の連中に知らせて來い。すぐに出發するといつてな」

「ハッ」

軍曹が忙がしさに扉の奥に去ると、

「さ、お嬢さん、こつちへいらつしやス」

と少佐は少女の肩を抱くやうにして内庭に出て行つた。そこには一臺の立派な軍用乗用車が待つてゐる。少佐はその扉を開けて、

『さア、お乗りなさい』

と少女にすゝめる。

『いゝえ、私、運轉臺の隅で結構ですの』

『いや、そんな遠慮は要らんですよ。あなたは此の眞ん中におかけなさい』

『まア、そんなにして載っていていゝんでせうか？』

『構ひませんとも。我々もお蔭で長い自動車旅行が慰められます。アツハツハ……』

少佐はわざと快活さうに笑つて見せた。

參謀將校の會話

ルキ・オートン少佐の乗用車には、他に大尉が一人、中尉が二人、何れも參謀肩章をかけた將校が乗り込んだ。少女はそのまん中に挟まれて、昂奮に沸き返るパリの街を後にしたのである。

コンピエーニュ、サン・カンタン、モーブージュを過ぎて、自動車が佛白國境近くさしかゝる頃には、もう少女はすっかり將校達と仲好しになつてゐた。

『ねえ皆さん、私の祖國ベルジウムは永世中立國なんですけれど、それでもドイツの軍隊は押し寄せて来るんでせうか』

『御安心なさい。お嬢さん。その爲にかうして我々がブラッセルへ行くのぢやないですか。御承知の通り、ドイツは昨日ベルジウムに最後通牒をつきつけました。ぐすく／＼してゐればドイツ軍は必ずベルジウムに攻め入るでせう。ですから我々の方で一步を先んじて、ドイツ國境に攻め入つてやるんです』

『でも、永世中立國の國境から攻め入るなんて事は、禁じられてゐるんぢやないんですの？』

『なアに、平和な時に締結された國際規約なんでものは、一度大砲が響き出せば消し飛んでしまひますよ。それにフランスとベルジウムとの間には、前からちやんと密約ができてゐるんです』

『あら、ではフランスとベルジウムとは共同戦線を敷くんですの？』

『無論です。さ、握手をしませう』

「あア、嬉しいこと」

少女は嬉しさに四人の將校の手を、順々に固く握りしめる。オータン少佐の手を特に力をこめて握つた事はいふ迄もない。

自動車がベルジュームの首都ブラツセルの市街に入ると、少女は急にそはくして、

「あの、私を此の邊で降ろして下さいませんか？　もう此處迄作れて来て戴けば結構ですから」

と申出るのでしたが、今度は將校の方がきかなかつた。

「まア、いゝぢやないですか。もう暫く我々の相手になつて下さい。折角かうして知合ひになつ

て、此の儘お別れするのは残念です。シャンパンでもぬいて、お別れをしゃらぢやないですか」

少女は無理矢理にすゝめられて、フランス軍の參謀本部に宛てられた建物に伴れて行かれ、そ

この將校集會所につれ込まれた。

見ると、中には多勢の將校達が卓を圍んで、何事か昂奮し乍ら語り合つてゐる。正面の椅子に

ゐた立派な軍装の將校が、ふと怪訝さうに少女の方を見た。

「誰かね？　その婦人は」

將校の詰問に室内は瞬間シーンとして、一同の視線が少女の上に注がれる。

「リツケル少將閣下、ベルジュームの愛國少女を御紹介申します。ヴイトリー大佐の令嬢です」

少佐が少々狼狽し乍ら少女を紹介すると、

「ヴイトリー大佐……？　現役かね？」

と少將が怪訝さうに反問する。

「ハ……ハア」

と少佐がそれに答へやうとするのを、少女があわてゝ口を出した。

「いゝえ、あの……もう、豫備になつてゐるのですけれど、今度はきつと現役に復活するのだと思ひますわ。此の無防禦に等しい祖國ベルジュームを助ける爲に、はるくお越し下さいました事を、父に代つて厚くお禮申します」

さういつて少女は少將の前に膝間づいた。

「さア、恐縮です」

嚴格さうな少將の頬にチラツと微笑が浮ぶのを見て、少女はホツとためいきを吐いた。

「さア、お嬢さん、シャンパンをぬきませう」

オータン少佐に誘はれて、別のテーブルに腰を据えた少女は、パリから同行して來た將校達の

相手になり乍ら、時々リツケル少将の卓の方に耳を傾けてゐる。

少将は彼女の出現に腰を折られた話題に就いて、再び語り出してゐたのである。

「僕が積極策を主張するのはぢやね、現在の國境要塞の設備では、こつちから攻勢に出るより他はあるまいと思ふのぢや。守勢と攻勢とでは五割方兵力の相違が起るからなア」

「然し、攻勢作戦に出るにしたところで、兵力に不足はありませんか？ 獨軍が國境に集中してゐる兵力は随分多いやうですが」

「いや、その心配は不必要ぢやよ。實はな、昨日ドイツがベルジウムに最後通牒を送つた事を知つて、いよくイギリス軍が我々の戦線に参加する決意を固めたのぢやよ。二三日うちには七箇師團の歩兵と、八旅團の騎兵と、總計十六萬のイギリス軍がアントワープに上陸する筈ぢや」

浮の空でオータン少佐達の相手をしてゐた少女が、突然席を立上つた。

「私これで失禮しますわ。ブラッセルにゐる伯母を訪ねて父の消息を聞いて來たいんですの。若し父が出征してしまつては、永遠にお會ひできないやうな事になるかもしれませんからね。ね、さ、でせう」

「さうですか。では僕がそこまでお送りします」

少佐も一緒に席を立つた。將校集會所を出ると、少佐はいきなり少女の肩を抱きすくめるやうにしてささやきかけた。

「お嬢さん、もう一度僕と二人だけで會つて下さい。僕はあんたがとても好きになつた。此のまゝお別れするに忍びんです」

「まア、私もですわ。それでは伯母を訪ねて來てから、又何處かでお會ひませうか？」

「ほんとですね。では僕、パラス・ホルルでお待ちしてゐますから來て下さい」

「え、きつと行きますわ」

少女はしつかりと少佐の手を握り返して、通れるやうに參謀本部の建物をぬけ出して行つた。

奇怪な少女の正體

それから間もなく、少女の姿が軍人と避難民とでゴツタ返すブラッセル停車場に現れた。彼女は切符賣場の窓口に駆けつけると、

「私、アーヘンまで行きたいんですけれど、もうだめでせうか？」

と息を弾ませて問ひかけた。

『もう昨日から國境は封鎖されました。ドイツ領へ行く列車はありません。窓の奥からブツキラ棒な聲が答へる。』

『まア。それではリエージュ迄なら行かれますの？』

『汽車は通じてゐますが、軍隊の輸送で席がありません。お氣の毒ですが……』

『あら、私どうしませう』

彼女の泣き出しさうな聲を聞いて、窓の奥から若い驛員が覗くやうに顔を出した。

『ねえ驛員さん、何とかして戴けないでせうか』

少女はその顔に哀願する。

『さうですね。今夜一時か二時頃に臨時列車が一つ出ます。これは内證ですが、その場席を一つ譲つて上げませうか？』

『え、どうぞ。お願いしますわ』

驛員が勿體つけて出してくれた切符を、少女は定額の二倍近い金を拂つて買入れた。外はもう宵闇に閉されてゐた。だが、時計はまだやうやく八時を少し過ぎたばかり。

『まだ汽車が出る迄に五六時間もあるんだわ。その間どうしやうかしら？』

少女は混雑する驛前の廣場を見渡し乍らつぶやいた。その顔には、さつき參謀將校達と對座してゐた時のやうな可憐さは少しもなく、鋭い神經質な叡智と、何か物におびえてゐるやうな焦燥が漲り、年齢も急に三つ四つ老けたやうに見える。

『あツ、さうだ。もう一度あの參謀少佐に會つてやらうかしら？ 何か掴めるかもしれない。だけど危いわねえ』

口の中でつぶやくと、冷たい笑ひが神經質な頬にピクリと浮ぶ。二三分間躊躇してゐる様子だったが、聽て彼女は意を決したものの如く、つか／＼と驛前の混雑の中に姿を消して行つた。

さて、此の邊で筆者は此の奇怪な少女の正體を、こつそりと讀者諸君に知らせ置いて置いた方がよからう。ベルジュームの陸軍大佐の令嬢なんといふのは眞赤な嘘、彼女は 1・4・G・W といふ暗符號を持つ腕つききのドイツ女間諜だ。後日戦亂が 酬となつてから、ベルジュームのアントワープに置かれたドイツ軍西部戦線の間諜本部を牛耳り、聯合軍側から「マドモアゼル・ドクトル」の異名をつけられて、敵の恐怖の的となつたのは此の女なのである。時には小柄な姿態を利用して妙齡の少女になりすませ、時には黒装束を纏つて若い未亡人になりすませ、時には

百姓娘に化けたり、黒眼鏡の奥に神経質な瞳を光らせて女學者を装つたりして、幾度敵地深く紛れ込んだ事か知れない。聯合軍側では遂に戦亂が終結する迄、彼女の正體が掴み得ず、謎の女「ドクトール嬢」の異名で呼び通されてゐた。彼女の秘話はフランスで出版された間諜談にも、イギリス本にもアメリカ本にも、間諜書である限りは必ず記載されてゐる程有名であるが、彼女の本名を記してあるものは殆どない。たまにあつたとしても、それは別人を人違ひして記してゐるに過ぎない。戦後アメリカで公にされた有名な間諜書によると、彼女はニューヨークで捕縛され、自から爆死したなどと書いてある。だが、彼女は戦亂が終結する迄、立派に生きてゐたのである。

では、いつたい「ドクトール嬢」とはどんな女であらう。

彼女は軍部の高官を父に持つ生粹のドイツ娘だ。本名をアンネマリー・レツセルといつて、戦争勃發前にある騎兵大尉と戀愛に陥つたが、結婚生活に入ると間もなく、祖國の危機を目前にして愛人に死別し、若い未亡人となつたのである。かくして彼女は亡き愛人の遺志を継ぎ、女ながらも亡夫に代つて祖國の爲に一身を獻げようと決意して、自から間諜を志願して立つた愛國婦人なのである。

フランスで發行された間諜書によると、彼女は冷酷魚の如き醜婦で、人間的な温情などは薬にしたくも持ち合はせない女だと記してある。それは恐らく醜い百姓娘にでも扮してゐた彼女を目撃したからであらうが、愛國者などといふものは、敵國側から觀察すると凡そ憎むべき存在となるのだから、彼女が聯合軍側から酷評を受けるのはむしろ當然すぎる事であらう。

針の上のランデヴー

夜に入つてからグツと涼しくはなつたものゝ、八月三日といへば夏の最中である。パレス・ホテルの宿泊客は、何れもバルコンの卓を占領して、にはかに悪化した國際情勢を論じ合つてゐた。ベルジウム救援に馳せつけたフランス軍將校連のもて方といつたらない。若い女達に取り圍まれて、景氣よくシャンパンの壘を並べ乍ら、「ラ・マルセイユ」の合唱などをやつてゐる。

そのバルコンの一隅、コンモリとしたライラツクの植込みの蔭で、樂しげなランデヴーの語らひに耽つてゐるフランス將校と、若い小柄な少女とがあつた。

「よく訪ねてくれましたね。僕はもうお會ひできまいと思つてあきらめてゐたんですよ」

「まあ、私をそんな女だと思ひになるの。あなたは私の恩人ぢやありませんか。ベルジュームには恩人を欺すやうな女はゐませんわよ」

「や、これは失禮。で、お父さんの消息は判りましたか？」

「え、やつぱり現役に復歸してリエージュ要塞の守備に就いたんですつて。私、すぐにも父に會ひに行きたかつたんですが、あなたとの約束があつたので、今夜の最終の臨時列車で行く事にして、此の通り場席券を買つて來ましたの」

少女は汽車の切符を出して見せた。

「え？……？ 今夜の汽車で……？」

明らかに失望の色を見せて反問したのはオートタン少佐である。

「僕は今夜一晩、あなたと語り明かすつもりで部屋をとつて置いたのに」

「私もさうしたいんですけど、今夜の汽車に乗らないともう後は旅客列車が出ないんですつて」

「そりや残念ですな。然しリエージュなら、僕も二三日中にあの方面に出動しますから、あつちに着いたら居所を知らせて下さいね」

「え、きつとお知らせしますわ。だけど、リエージュはドイツ軍に攻められても大丈夫なんでせうか？」

「まあ、リエージュ要塞だけは、ベルジュームの國境要塞の中でも最も新しい型ですから、さう簡単に落ちやしませんよ。たゞ各堡壘の中間地區が最近殆ど改築されてゐないのと、各堡壘の前方に深い谷があつて、攻撃軍に有利な地點になつてゐるのが心配ですが、ドイツ軍がまだくと油断してゐるうちに、こつちから機先を制して攻め入りますから、一人だつて敵兵に國境を越させるもんですか」

少佐は得意さうに専門的智識をぶちまける。

「それではもうすぐに攻撃を開始するんですのね？」

「さうです。もう二三日うちでせう。その爲に僕等が出動するんですから」

「その他の要塞はどうなんですの？ 若し他の要塞が破られたらどうなるでせう？」

「ですから我々佛白聯合軍は、ゲーテ河の兩側のアンニユット、サン・トロント、テイルモン、アム・ミルの廣範な地域に亘つて、一齊に兵力を集中する方針になつてゐるんです。何しろ他の要塞は新らしく防備施設が殆どしてないので、守勢になつたらかなりの苦戦になるでせう。

リツケル少将が攻撃策戦を主張するのもその爲なんです。見ていらつしやい。四五日後には猛烈な勢で進撃が開始されますから』

『四五日後……？ まア、楽しみですこと』

何時か夜も更け渡つて、舊教寺院の鐘が不安な空に安らかさうな響きを傳へて來た。

『まア、もう十二時ですわ。私、停車場へ行かなければなりません』

少女はあわてゝ席を立つた。

『あ、もうそんな時間ですか。残念ですなア。ぢや停車場迄一緒に送らせておきましょう』

少佐は少女のさし出す手をしつかりと握りしめ、グイと彼女の身體を引き寄せると、いきなり頬に接吻する。そして二人は肩をすり寄せるやうにしてホテルを出て行つた。

深夜の停車場は前にも増した混雑である。最後の臨時列車を遁すまいとする乗客が改札口にもホームにもひしめき合つてゐた。その中に混つて鋭い瞳を八方に配り乍ら、何かを捜し出さうとしてゐる人物が、あつちにもこつちにも見受けられる。國境要塞方面へ行く列車を見張る防諜網の視線である事はいふ迄もない。

少女は流石に不安さうな眼差しを周圍に配りつゝ、軍装の少佐の蔭にかくれるやうにして、改

札口からホームへ雑沓の中を分けて行く。二等車の車室に入る迄は無事だったが、彼女の姿がホームから見えなくなつた時、眼の鋭い黒服の男が少佐の傍に歩み寄つた。

『一寸お訊ねしますが……』

『何ですか？』

『今あなたがお見送りになつた御婦人は』

『リエージュ要塞の守備に就いてゐる父親を訪ねて行く、ヴィトリ―大佐の令嬢です。怪しい者ではありません』

『ヴィトリ―大佐……？ それはフランス軍の將校ですか？』

『いや、ベルジュームの豫備將校だが、今度現役に編入になつたのださうです』

『ヴィトリ―大佐ですか？』

と黒服の男は念を押してから、

『や、失禮致しました』

と少佐に一禮をして雑沓の中を去つて行つた。

車室に納つた少女は、見送りの少佐にもう一度挨拶をしようとして車窓から首を出した瞬間、

黒服の異様な男が少佐に何か話しかけてゐるのを発見した。

『おや……？ 何だらう？』

彼女の額に暗い蔭がサツと走つた。

危機一髪

ハチ切れんばかりに乗客を満載した臨時列車が、ブラツセルの燈火を後にして、眞暗な闇の中に幕進を開始してから、ほんの五六分しか経たぬ頃である。突如、消魂しい汽笛が鳴り響いたと思ふと、急停車の激しい衝動が乗客を驚ろかせた。

『あツ……？ 何だらう？』

ハツとして明け放してあつた車窓から顔を出したアンネマリーは、列車の前方の闇の中を走り寄つて來くる提燈の幾つかを発見した。その光芒の中に何かキラ／＼と光つたのは、正しくサールに違ひない。その瞬間、彼女の顔色はサツと蒼ざめた。

『さけなすー』

思はず口の中でつぶやくと、彼女はいきなり車室をぬけ出した。

間もなく制服の憲兵だの、防諜警察の係員だのがヅカ／＼と車室に踏み込んで來た。

『臨検です！ 旅券を見せて下さい』

『車室の前後の扉口に憲兵が厳然と張り込んで、蟻一匹でも通すまいといふ氣構へだ。男の乗客の検査は頗る簡單だが、若い婦人客に對しては執拗な訊問が繰返される。然し、遂に彼等は空しく此の臨時列車から引上げなければならなかつた。彼等の手配した女間諜の嫌疑者は、さしも嚴重を極めた捜査網をどうして脱したのか、何處からも発見する事はできなかつたのである。』

二十分餘りの臨時停車の後、列車は再び闇を衝いて幕進を開始した。少女はいつたいどうしたのであらう？ あの嚴重な警戒網を突破して車外に遁れ去つたのであらうか？

此の臨時列車がリエージュ停車場のホームに滑り込む爲に速度を落して郊外にさしかゝつた時、曉闇の線路上に最後尾の車輛から、ポロリと何か轉げ落ちた物があつた。列車が何事もなかつたかのやうに走り去つた後に、ポツリと取り残された黒い物體は、聽てふとモツクリ起き上つたかと思ふと、正しく人間の姿になつて曉闇の彼方に走り去るのである。それがドイツの愛國間諜アンネマリー・レツセルだつたのである。

彼女は防諜網の臨検を直感した瞬間、素早く車室をぬけ出して、次の車輛との連結臺の間隙から車臺の下に潜り込んだのであつた。車輛の間からそつと外部を窺ふと、列車を挟んだ兩側の線路上にズラリと監視の眼が並んでゐる。臨検が前部の車室から開始されたのを知つた彼女は、到底車外に遁れ出す事の不可能を覺つて、車臺の下を潜りぬけ乍ら最後の車輛にたどり着いたのである。若し、そこまで達しないうちに列車が動き出してゐたなら、彼女は轍の下に無惨な屍骸となつてゐたかもしれない。

かくして彼女は最高部車輛の下にしつかりかちり附いて、脱走の機會を狙つてゐたのだつた。最初の考へでは、列車が次の驛に停車したら、そこで脱走する心算だつた。だが、彼女は今祖國の戦機にとつて重大な鍵を握つてゐる事を自覺すると、一刻も早く伯林の諜報本部に此の報告をしなければならぬ責任を感じた。その責任を果たす爲には少しでも獨白國境に近い所まで此の列車を利用しなければならぬといふ事に想到した。

『さうだ、行ける所まで行つてやらう』

彼女はか弱い腕のしびれるのも忘れて、激しい動搖に振り落されさうになるのをしつかりとしがみつき、たうとうリエージュ停車場の一步手前まで來てしまつたのだ。

リエージュ停車場には無論嚴重な監視網が張られてゐる事を想像して、もう一步といふリエージュ郊外の線路上に、危険を冒して跳び降りたのである。

果せる哉、臨時列車がリエージュ停車場に到着すると、ホームから改札口を埋めた監視役人によつて、乗客達はもう一度嚴重な調査を受けたのである。だが、彼等防諜網の人々は空しく引上げなければならなかつた。

不遜な怪農婦

しら／＼と夜が明けかける頃、ドイツのベルジウム國境に近いナスブルとオイペンとの中間の國道上で、歩哨の任務に就いてゐたドイツ軍國境守備隊の兵卒が、一人の怪しい農婦を發見して誰呼した。

『こらッ！ 止め！ 何處へ行くかッ？！』

頭からスツポリと頭巾を被り、ゴツ／＼の木綿の服を着て、太い糸で編んだ靴下をはいてはゐるが、靴だけは華奢なハイヒールを履いた奇怪な農婦は、その聲を聞くといきなりその前に走り

寄り、

『さ、早く私を司令部へつれて行って調べなさい。早く』

と流暢な伯林風のドイツ語で、半ば命令的にいふのである。歩哨は此の不遜な農婦を小哨長の兵舎へつれて行った。暁の夢を破られた小哨長の軍曹は、寝呆け眼をこすり乍ら農婦を見て、正しく怪しい者と睨んで身體検査を行はせた。すると、果せる哉、ベルジウム政府の発行した旅券と、パリの警察署の証明書が現れた。

『おいこら、貴様は何だ』

小哨長の訊問に對して、彼女は答へた。

『あなたには話ができませぬ。早く私を師團參謀の所へつれていらつしやう』

『師團參謀の所へだと？ そんな必要があるもんか』

『あるかないかあなたなどには判りませぬ。早くつれて行かないと後で嚴罰に逢ひますよ。私はドイツの間諜です』

『間諜なら何かその證據があるだらう？』

『そんな證據を持つてゐて、もし敵地でこんな検査を受けたらどうなると思ひます。さ、早くつ

れていらつしやう』

小哨長は半信半疑乍ら、彼女を中隊長の許へつれて行った。

彼女はそこが師團參謀の許でないのを知ると、柳眉を逆立てんばかりに激怒した。

『あなた方は何といふわからずやなんです。師團參謀の所へつれて行くのが免倒なら、直接ベルリンへ電報を打つて、1・4・G・Wが今此處で捕まつてゐると報告して下さい。宛名はケーニヒ・グレッツァ街のマテジウス商會です。よござんすか』

中隊長はいはれるまゝにベルリンへ至急公電を發してみた。すると、それからほんの一時間経つたか経たない頃、守備隊司令部から參謀大尉が自動車を飛ばしてやつて來た。大尉は中隊長と小哨長とに對して、いきなり頭から怒鳴りつけた。

『お前達はいつたい何の爲に歩哨に立つとるんだ。目は何の爲についてゐるのか。お前達が捕へたといふ女間諜は何處にゐる？ 何故すぐに司令部へ案内せんのだ。バカツ』

中隊長はすつかりめんくらつて、參謀大尉を怪しい農婦のゐる所へつれて行った。大尉は上官にでもするやうに、頗る慇懃な舉手の禮をしてからいふのである。

失禮致しました。只今ベルリンの諜報本部から守備隊司令部に電話がかゝつて居ります。あなた

たに電話口に出ていたゞきたいと申しますので、自動車でお迎へに参りました」

「あゝ、待つておましたわ。さ、早く私を伴れて行つて下さい」

大尉は勇み立つ農婦を立派な自動車に招じて、守備隊司令部に戻つて行く。守備隊司令官公室の電話は、さつきからベルリンと繋ぎつ放しになつたまゝ彼女の來るのを待つてゐた。彼女は飛びつくやうに送話器に口を當てると、

「もしく、1.4.G.Wです。おわかりですか。あゝ、マテジウスさん。私はパリか

ら、ブラツセルに廻つて、佛白聯合軍の参謀本部の動向を探つて來ました。これからいひますよ。地圖と紙と鉛筆とを御用意下さい」

息せき切つてそれだけいふと、彼女は傍に目を見張つてゐる司令官にも地圖を擴げるやうに目配せして、一氣に報告を喋り出した。

「よござんすか。ベルジュームはフランスと共同戦線に立つてドイツに對抗する事に決定しました。フランス参謀本部作戦部長リツケル少將は、對獨攻撃策戰を決定し、その行動開始は二三日後とみられます。猶ほイギリスも佛白軍に参戰を決定し、三四日後には十六萬の歩騎兵團がアントワープに上陸する豫定です。次にベルジュームの國境要塞の現状を報告します……」

精密を極めた報告が、水を流すやうに彼女の口から流れ出す。

ベルリンの参謀本部で此の報告を聞き取つたマテジウス参謀部長は、直ちにこれを参謀本部に報告する。寸時の後、参謀本部に軍の要人が續々と召集されて來た。此の報告を中心に作戰會議が開かれたのである。それから一時間ばかり経つたと思ふと、参謀本部から面に異様な緊張を漂はせた將星連を乗せた自動車が、カイザー・シユロツス（宮城）に飛んで行つた。御前會議が開かれるのである。

國境軍師團長エムミヒ將軍の許に次の命令が通達されたのは、その日の午後の事である。

（貴師團は直ちに強襲を開始し、速かにリエージュ要塞を攻略すべし）

その日、一九一四年八月四日、遂に歐洲大戰の火蓋は獨白國境線に切つて落されたのである。精銳ドイツ軍が潮の如く國境を越えて押寄せると、まだ準備の整つてゐなかつた佛白聯合軍は、ひとたまりもなく要塞地帯を放棄してしまつたのである。

さしも要害を誇つたリエージュ要塞も、まだ八月五日の聲を聞かないうちに、怒濤の如きドイツ軍の泥靴に踏みにじられてしまつた。それもその筈である。リエージュ要塞の欠陥は、恰も掌を指すが如くドイツ軍主腦部の握るところとなつてゐただから。

翻弄された防諜官

自殺を計る若い未亡人

「おや……？」

ギボン君は思はず飲みかけたコーヒー・グラスを置いてちつと或る一點に視線を据えた。その視線の行きづまりに野暮くさい喪服を纏った若い女が一人、しよんぼりと腰をかけてゐる。それだけならば別にギボン君の注意をひく事はないのだが、今し方、彼女はハンドバッグの中からこつそり取り出した小壘の中の液體を自分の前に置かれたコーヒー・グラスの中にタラ／＼と落したのである。その様子がどうも只事ではない。

「服毒自殺でも……？」

彼の第六感にサツと感じたのだ。喪服を着てゐるところを見ると、彼女は最近に夫を失つた未亡人に違ひない。無論戦死だらう。あの若さではまだ結婚して間もなく夫を戦線に奪はれたものに相違ない。とすると、絶望の餘り自殺を決意するといふ事は、決して不自然な想像ではない筈だ。

よく／＼見ると、彼女の兩眼が涙にうるんでゐるではないか。

「さうだ。それに違ひない」

ギボン君は突如として席を立つた。彼女は今や、危険極まるグラスを唇に當てようとしてゐるのだ。

「お……お待ちなさい」

彼は飛鳥の如く駆け寄りさま、彼女のグラスをつまんだ右手を拂ひのけた。

「あッ……？」

女は驚きの餘り呆然として、ギボン君の顔を見詰めた。

「僕はすつと前から、あなたのする事を見てゐたのです。そのグラスの中に何が入つてゐるのか、僕はちやんと知つてゐるのだ。短氣な事をしちやいかんですよ」

「まア……」

呻めくやうにいつたかと思ふと、彼女の頬をポロ／＼と涙が轉げ落ちる。

「僕には何も彼もわかつてゐる。あなたは戦死した夫の後を追ふつもりだつたのでせう。とんで

もなし』

『まア……』

もう一度呻めくやうにいふと、彼女はテーブルに顔を埋めて泣き出した。

ギボン君は得意だった。自分の第六感が、印度の豫言者よりも的確だった事に、いひやうのない快感を覺えた。

『さ、こんな所で泣いてゐたつてしやうがないですよ。僕が送つて上げるから、お宅へお歸りなさい、つまらない考へを起しちやいかんです。さ、奥さん』

彼はせき立てるやうに女を椅子から立たせると、自分の分と彼女の分と二人分のコーヒー代を支拂つてカフェーのテラスを出た。

パリ郊外のブーロン森林公園には、もう夕霧が立てこめてゐた。ギボン君は片手で女の肩を抱くやうにして、ひどくロマンチックな氣持になつて歩き出した。その腕の中で、女はしきりに嗚咽を續けてゐる。

『奥さん、まア考へてごらんなさい。今フランス中には、あなたと同じ悲しみを經驗してゐる御婦人が、何萬人ゐるかしれんですよ。悲劇のヒロインはあなたばかりではない。もつと強く生

きてさへゐれば、またきつとより以上の幸福がめぐつて來るのですから』

『有難う。でも、あなたはどうして、そんなによく私の事を御存じなんですか？』
女の聽て涙を拭ひながら、怪訝さうに反問した。

『そりやあなた、僕は職掌柄、その位の事はわかりますよ』

『職掌柄と仰しやると……？』

『これは秘密ですが、僕は間諜防止警察に勤務してゐるのですから』

『まア、さうでしたの』

『ハツハ……どうです。驚いたでせう。あまりキツパリと的てたので』

『ほんとにびつくり致しましたわ。私、死神にでもつかれてゐたんですわね』

『さうかもしれないです。自殺するなんて、實につまらん事ですよ。勿體ない』

『でも私、さつきまでは死ぬ事より他、何も考へてゐなかつたんですの』

『ぢや、今はもう死ぬ氣持はなくなつたんですね』

『え、お蔭様で命拾ひを致しましたわ。どうしてあんなに思ひ詰めたのでせう』

『いや無理はないです。時に、お宅は何方の方面です』

『あの、私……もう家がありませんの。夫は死んでしまひましたし、自分も死ぬつもりで、すっかりたんでしまつたものですから……』

『おやく、それぢや兎に角、僕の下宿へ来てはどうです。たしか僕の隣室が空いてゐる筈ですから』

『有難うございます。そんなにお世話になつていゝのでせうか？』

『構はんですとも、幸ひ僕はまだ獨身ですから、誰も咎める者はありません。これも何かの縁といふものでせう』

『ほんとに申譯ございませんわ』
自殺を計つた若い未亡人は、その夜から、間諜防止警察の若い下士官ギボン君の隣室に住む事になつたのである。

一九一六年——歐洲大戰が勃發してから、三年目の、淺春三月のある日曜日の出來事である。

眞紅のバラ

翌日の夕方、ギボン君は勤務時間が終るのを待ち兼ねて、飛ぶやうにして下宿へ歸つて行つた、先づ自分の部屋に入る前に、彼女がどうしてゐるかと思つて、隣室の扉をコツコツとノックしてみると、豈計らんや、それに應じて開かれた扉は彼自身の部屋の扉だ。

『あら、お歸りなさい。もうお歸りになる頃だと思つて、あなたのお部屋を飾つてゐましたのよ』

見ると、昨日の野暮くさい喪服を何處に脱ぎ捨てたのか、目の醒めるやうな派手な衣裳を纏つた彼女は、まるで見違へるやうな美しさだ。

『よッ、凄。ど……どうしたんです？』

『どうもしませんわ。あんな濕っぽい着物を着てゐるから、あんな變な氣持になるのだと思つて、さつきこんなのを買つて來ましたのよ。どう？ 似合つて』

『ステキだ。その方がどれ程いゝかしのれない。まるで人が違つたやうですよ』

『え、私、今日から違つた人間になるつもりですの』

急に陽氣になつた彼女は、一層ギボン君の胸の血を湧き立たせた。しかも、彼が自分の部屋に入つてみると、ベッドの枕許に見馴れない花瓶が置いてあつて、眞紅のバラの花が藪都として匂

つてゐる。

『こいつはたまらん。俺はすばらしい拾ひ物をしてしまったぞ』

彼は一人になると、思はずさうつぶやいて眞紅のバラに接吻をするのだつた。

ギボン君が彼女に結婚を申込んだのは、それからたつた二日目の夜の事である。無論二つ返事と思つてゐたのに、彼女の返辭はいさゝか意外だつた。

『あら、私、まだ結婚なんて事を考へる餘裕はありませんわ。あなたは私にとつて命の恩人なんですから、無論感謝はしてゐますけれど……』

『然し、僕はもうあなたなしには一日もゐられないやうな氣持になつてゐるのです。僕はあなたを、あなたの前の夫よりもつと幸福にして上げる自信を持つてゐます。それが信じられないのですか？』

『いゝえ、さういふわけぢやないんですけれど……』

『そんなら僕の申込みを容れてくれてもいいぢやないですか。僕はあなたの爲になら、どんな犠牲でも拂ふつもりですよ』

『では私、ツールーズの田舎にゐる母に相談して來たいと思ひますわ。母が同意してくれさへす

れば……』

その翌朝、ギボン君はツールーズの母の許へ旅立つ彼女を停車場へ送つて行つた。彼は自分でツールーズ行の切符を買つて與へ、スペイン國境方面行の列車に彼女を乗り込ませたのである。

だが、その列車がバリを離れると間もなく二つ目か三つ目の驛で停車すると、彼女はすつと列車から姿を消してしまつた。そしてツールーズとは反對のフォンテンブロー行の列車に乗換へるのだつた。

列車がフォンテンブローの停車場に着いて後、女がブラツトホームを改札口の方へ近づいて行くと、さつきから改札口で人待顔に立つてゐた老人が、大手を擴げて彼女を迎へるのだつた。

『おゝ、マリイ、俺はどんなに待ちくたびたかしのぞ。よく來てくれたのう』

『だつて叔父様、お父様が途中を御心配なすつて、なか／＼手離して下さらなかつたんですもの』

『ハツハ、ハ、。さうぢやらう、目の中に入れても痛くない一人娘ぢやからのう。さ、叔母様も待ち伧びとる。早く家へ行かう』

二人は驛前に待たせてあつた馬車に乗り込んだ。

馬車の中で二人きりになると、彼等二人の會話が、にはかに小聲のドイツ語になるのである。
『如何ですか、パリの状況は』
老人が質問する。

『とてもステキよ。とう／＼私、間諜防止警察の下士官を虜にしてしまつたわ。だから、これからは間諜防止網の動きは、私の手で手にとるやうに判るわ』

『それは大成功ですな。昨日からベルリン本部の使者があなたを待ち兼ねて居ります。何か新しい本部の指令を持つて来てゐるのです』

『さう。私の方にも報告が山のやうにあるのよ。ベルリンをびつくりさせるやうなのが』
馬車は町外れの豪莊な邸宅の門内に消えて行つた。

黒星付の女間諜

ギボン君にとつて待ち遠しい二日間が過ぎ去つた。

『もう今日位はツールーズから歸つて来る筈だが……』

三日目の朝、諜報防止警察に出勤した彼が、ぼんやりデスクにもたれて彼女の事を考へてゐると、突然部内が物々しい緊張に湧き立つて來た。

『おい、ギボン君、何をぼんやりしてゐるんだ。部長室に召集がかゝつてゐるんだぜ』

同僚にボンと背中を叩かれ、彼はハツとして椅子から立上つた。

部長室では全部員が目白押しをして、部長の緊急命令を待つてゐる。部長が血走つた眼で一同を見廻はした。

『諸君はマドマゼル・ドクトールの名を知つとる筈だ。今朝、そのマドマゼル・ドクトールが當パリ市内に潜入したといふ確實なる情報か舞ひ込んだのである。これは我々にとつて容易ならぬ問題だ。我々の面目にかけても彼女を逮捕せんけりやならん。大いに馬力をかけて貰ひ度い』

『マドマゼル・ドクトール』

『マドマゼル・ドクトール』

あつちでもこつちでも此の異様な女の名が反復的にさゝやかれた。

それもその筈である。マドマゼル・ドクトールの名は、聯合軍側の間諜網にとつて大きな恐怖の的だつた。誰もまだ彼女の正體をはつきりと掴んだものはない。彼等の間で判明してゐる事

は、彼女がまだうら若い小柄の女性であつて、ドイツの間諜網を或る程度牛耳る程の勢力を持つてゐるといふ位のものだつた。無論、彼女の本名などは判つてゐない。で、彼女の頭腦が科學的に優れてゐる事と、彼女がドイツ人であるといふ事からマドマゼル・ドクトールといふ異名が冠せられてゐたのである。

部長室から解放されると、部員達は各それぞれの部署によつて、マドマゼル・ドクトール捜査上の秘密會議が行はれた。

と、その最中に、

『おい、ギボン君、電話だよ』

ギボン君は呼び出されて、一人會議の席を外して電話室に入った。

『もしく、ギボンさんですか？ 私ですの、今歸つて來ましたわ』

待ちに待つた懐しい彼女の聲である。その瞬間、彼の頭の中からマドマゼル・ドクトールも消え失せてしまつた。

『ど……どうでした？ お母さんの御意見は』

『あら、電話でなんか話せまわ。すぐに來て下さる？』

『え、行きますとも。今、何處です？』

『ツールズから歸つたばかりで、サン・ラザール停車場前のカフェーにゐますのよ』

『さうですか。すぐに行きます。待つてゐて下さいよ』

秘密會議はそれからまだ三十分近くも續いた。それが終るのを待ち兼ねて、ギボン君はサン・ラザールに馳けつけた。

『まあ、どうなすつたの？ 随分待たせるのね』

不機嫌な彼女の顔を見ると、ギボン君は夢中になつて説明にとめる。

『いや、少しばかりこみ入つた事件が起つたもんですから、秘密會議につかまつてしまつて、どうしてもぬけ出す事ができなかつたんです。勘辨して下さい』

『こみ入つた事件で、やつぱり間諜の事なんですか？』

『無論です。變な奴が此のバリに潜入したといふ情報が入つたんですよ。餘計な奴が飛び込むんだから、あなたにまで迷惑をかけてすみません。時に、お母さんの方はどうでした』

『だめなんですの。戦争が済む迄は、誰とも結婚なんかしちやいけないつて……』

ギボン君の顔色がサツ蒼さめた。が、彼女はすかさず慰めるやうに、
『でも、いゝぢやありませんか。戦争さへ済めばいゝんだから。母は私に、もう一度あんな悲しい思ひをさせたくないの、反対してゐるだけなんですわ。私二三日お別れしてゐる間に、あなたをすつかり愛してゐる事に気がつきましたの。ねえ、二人がお互に愛し合つてゐるといふ事だけはいゝぢやありませんか』

『有難う。あなたからそのお言葉を聞かせて貰へば澤山です。有難う』

ギボン君は彼女の手を、力いつばい握りしめた。

と、彼女は彼の表情を盗むやうに見て問ひかける。

『ねえギボンさん、さっきのこみ入つた事件で、どんな事なんですの？ 變な奴つて、やつぱりドイツの間諜かしら？』

『無論です。とても凄いだドイツの女間諜なんです』

『まア、女間諜……？ 女で間諜をするやうな人も、あるんでせうか？』

『あるどころぢやないです。その女は聯合軍のブラツクリストに、特に黒星がつけてある位凄いな間諜なんです。名前もわからなければ、寫眞だつてすつと前にベルギーの將校達と一緒に撮つた』

の一枚あるきりなんです。私達の間ではそいつの事を、ドクトール嬢と呼んでゐますがね』

『ドクトール嬢……？ 随分變な名前ですことねえ』

彼女はふと異様な微笑を浮べるのだつた。

ギリシヤの商人

その翌朝のバリの各新聞紙は、一齊に凄いだドイツの女間諜『マドマゼル・ドクトール』に関する記事を掲載した。中には曾てその女間諜が、ベルギーの首都ブリュッセルに潜入してゐた頃、大膽にもベルギー軍の將校達と一緒に撮つた寫眞を添へて、彼女を逮捕した者には政府から現金五十萬フランの賞金が授けられるといふやうな事が報じてあつた。

ギボン君が朝の食卓についた時、

『出てるわよ。そら昨日のお話の……』

といつて、彼女がその新聞紙を差出した。

『ホホウ、出た〜』

奪ふやうにしてその紙面に見入るギボン君の横顔を睜め乍ら、彼女は肩をすり寄せた。

「ねえギボンさん。あなたが捕まへても五十萬フラン貰へるんでしょ？」

「そりや勿論さ」

「どう？ 私をその女だといつてつれて行つて、五十萬フラン貰つては」

「馬鹿な。ハツハ……」

「でも、此の寫眞の女、何處か私に似てゐるぢやありませんか」

「うむ、成程ね他人の空似つて事はよくあるもんですよ」

「それぢや私をつれて行つてもだめかしら」

「ハツハ……。諜報防止警察の人間が盲目だつたらね」

朝食を済ませて、急いで出勤して行くギボン君を見送ると、彼女は誰にいふとなく、

「ぐづくしちやゐられないわ。早くすまसानければ……」

とつぶやき乍ら、あたふたとギボン君の下宿を出て行くのだつた。

その頃、パリのプロマント街にムニエ商會といふ貿易商があつた。店主はコンスタンチン・クドヤニス氏といふ若いギリシヤ人で、アフリカ殖民地相手に雜貨を賣込んでゐるといふことだつ

た。

その店に、漂然と姿を現はしたのが彼女である。

「あ、これはく、よくいらつしやいました。さあ、どうぞく」

店主のクドヤニス氏は頗る鄭重に彼女を迎へて、奥の一室に招じた。ピシャンと扉を閉めて二人きりになると、彼女は待ち兼ねたやうに小聲で要談に入る。

「クドヤニスさん、あなたの奥さんは、元ダンサーだつたわね？」

「さうです。それがどうか……？」

「どうでせう、その方にボルドウへ行つていただけないでせうか？」

「といふと、やはり例の方の用件で……？」

「無論ですわ」

「折角ですが、それだけは御免蒙ります。何故つて、妻には私の此の職業を全然知らせてないのですから」

「いゝえ、無理に知らせる必要はないのよ。仕事はたゞ、あの港にイギリスの軍人を積んで入る船の名を、一々書き留めて送つて貰へばいゝのですから、丁度いゝ事には、ボルドウの海岸通り

のカフェーで、ダンサーを募集してゐる廣告が、あすこの藝界新聞に出てゐるんです。だから、あなたの奥さんは一番適任ですわ。どうでせうね？」

「さア、妻が何といひますか……」

「兎に角、あなたからうまく口説いて下さい。それに對しては本部から充分な報酬が出る事になつてゐるのですから」

「さうですか。では、一應妻に相談してみる事にしませう」

「さう。それぢや夕方、私の方から此處に電話をかけますから、その時迄にはつきりした返事を聞かせて下さいね」

夕方、彼女がムニエ商會に電話をかけてみると、クドヤニス氏は妻がボルドウ行を承諾したといふ事だつた。

ところが、その夜、時間外れに疲れ果て、下宿に歸つて來たギボン君の口から、彼女は意外な事を聞かされたのである。

「いやどうも、今日の忙しいのにはあきれてしまつた。今朝の新聞記事を見て、五十萬フランにありつかうといふ慾深連が、ひつきりなしに間諜防止警察へ押しかけるんです。僕等は一々その

密告を秘密裡に調査しなけりやならないんだから堪つたもんぢやない」

「まア、それぢやその凄い女間諜は、やつぱりバリにゐるんですの？」

「なアに、わからんですよ。中には如何にも自信ありげに、ドクトール嬢の居所を知らせるから、前金で十萬フランよこせなんていつて來るのもあるんだ。で、今その男の身元を調べてゐるんですがね」

「まア！ それがほんとだと、その人に五十萬フランとられてしまふのね。……何といふ人」

「ギリシヤ人の商人で、クドヤニスといふんです」

「え……？ クドヤ……？」

思はず愕然として口から出かゝつた言葉を彼女は中途でグツと呑み込んだ。

「さう、クドヤニスです。變な名前だから却つてよく覚えられるんですね。明日の午前中にその十萬フランを受取りに來て、明日の夜ドクトール嬢の身柄を引渡すといふのですよ。それで今迄かゝつて身元を調べたんですが、どうしてもはつきりした事が掴めないのです、すつかり參つちまひましたよ」

ギボン君は大袈裟に疲れたやうなふりをしてみせるのだつた。

裏切者の歩む道

翌朝、ギボン君が甘い夢の續きに陶酔してゐる頃、その隣室をこつそりとぬけ出した彼女は、近くの公衆電話に飛び込んで、クドヤニス氏を呼び出した。

「北停車場前のカフェーまですぐ来て下さい。あなたに急にお渡しするものがありますから」
貪慾なクドヤニス氏は「あなたに急にお渡しするもの」といふ言葉に釣られたに違ひない。急いで家を出て、北停車場に向つて急いで行くと、ふと彼を追ひ抜かうとする一輛の辻馬車がある。それが彼を追ひ越したトタンに、ビタと急停車した。

「クドヤニスさん此處へお乗りなさい。早く」

ふと見ると、彼女だ。彼は引つ張り上げるやうに、彼女の馬車に乗り込んだ。馬車は再び勢よくパリの街を走り出す。

彼女は口を切つた。

「昨日お約束した特別手當が、今日夕方届く筈ですわ。あなたは今夜七時にベルリンから来た密使に會つて受取つて下さい。たしか二十萬フランの筈です。その時に此の密書を先方に手渡しして下さいよ。密使と會見する場所は、此の包みを開ければ書いてありますわ。わかりましたわね」

「わかりました。色々御配慮を恐れ入りますな」

「いゝえ。それから奥さんは、明日の朝ポルドウへ出發して下さいな」

「承知しましたとも」

「よくつて。私はまだこれから行く所がありますから、これで今日はお別れませう」

彼女は辻馬車を止めさせると、クドニヤス氏を一人馬車の中に残して、すつと人混みの中にまぎれてしまつた。

その日の午後、間諜防止警察内のギボン君に宛て、一通の速達郵便が舞ひ込んだ。咄嗟に彼は、隣室から朝早く姿を消した彼女の手紙だと直感して、急いで封を開いてみた。が、内容は細かくタイプライターで打つた書面で、差出人の署名がしてない。

「はてな……？」

一抹の疑問に包まれ乍ら、彼はタイプライターの活字を拾つた。

(私はフランスを思ふ善良な一國民です。貴下が昨日來、ギリシャ商人コンスタンチン・クドニヤスなる人物に就いて探査せられる事を知り、此の密告書を呈します。彼こそはドイツ間諜の手先となつて活動しつゝある憎むべき人物です。特に證據を擧げる必要はありません。今夜七時に彼はパリ郊外モンテリールのレパブリック通りにあるホテル・ド・ラ・レパブリックに於て、ドイツ間諜に重要な密書を手渡す事になつてゐますから、その現場を捕縛すれば總て一目瞭然となる筈です。なほ、元ダンサーであつた彼の妻を捕へて訊問されば、一層詳細なる事實がわかるでせう。彼女は夫の命令により、明日中にボルドウへ行つて、ドイツ間諜部の爲に働く筈になつてゐます)

ギボン君は椅子から飛び上つて、いきなり部長室に飛び込んで行つた。

その夜七時、パリ郊外のホテル・ド・ラ・レパブリックの周圍は數十人の間諜防止警察部の刑事達によつて固められた。そんな網が張られてゐようとは夢にも知らぬクドヤニス氏は、二十萬

フランの特別手當を夢見て悠然とその玄關に歩み寄つて行つた。

ところが、そのホテルで彼を待つてゐる筈のドイツ間諜部の密使は七時が八時になつても姿を現はさない、何となく不安になつて來た彼が、遂に會見を斷念して愴惶とホテルを出ようとした時、

『もしく、クドヤニスさん』

玄關の外の物蔭からぬつと顔を出したのは豫て間諜防止警察を訪ねた時顔見知りになつた刑事である。

『あ、あなたは……』

思はず出かゝつた驚きを、あわてゝグツとのみ込んだが、既にもう遅かつた。

『成程、君ならばドクトールの居所を知つてゐるかもしれん。さ、僕と同行してくれ給へ。フツフ……』

薄氣味の悪い笑ひと共に、刑事の手がグツと彼の二の腕を掴んだ。と同時に、十四五人ばかり、見慣れない異様な人影が、物々しく彼を取巻いてしまつた。

本部に連行したクドヤニス氏の身體検査を行つてみると、果せる哉、密告の手紙にあつた通

り、内ポケットの奥から相当重要なフランス軍部の秘密情報が現はれた。彼はそのまま敵軍の間諜として獄舎に投ぜられたのであつた。

同時に、彼の住居にも手が入り、元ダンサーであつた妻が連行されて来た、クドヤニス氏の方は固く口を緘して、ドイツの間諜であつた事を自白しなかつたが、妻は恐怖に戦き乍ら、知つてゐる限りの事を残らずしやべつてしまつた。

さうして彼等夫婦の罪状は明白になつたのである。

美しい鬼女の魅惑

ギボン君は偉大な土産話を持つて、夜更けてから下宿へ飛んで歸つた。だが、昨日まで彼の歸りを待つてゐてくれた彼女は、その朝彼がまだ眠つてゐる間に姿を消したまゝ、隣室に歸つてゐなかつた。

その代りに、彼のベット上に一通の速達郵便が置いてあつた。

あわてゝ封を開いてみると、文面は至極簡単である。

(ドクトール嬢を捕縛なさる事はできなくても、あなたは分に過ぎた功績をお挙げになつた筈です。きつと十萬フラン位はお貰ひになれるでせうから、それでいゝお嫁さんをお迎へになつて、幸福な將來を築き上げて下さい。

(隣室の女)

ギボン君はボカンとして煤けた天井を見上げるのだつた。

それから間もなく、クドヤニス氏は敵國の間諜として死刑を宣告され、サン・ラザール監獄の廣場で、銃刑に處せられることになつた。

その日、彼は太鼓を打ち鳴らして入つて来る歩兵一小隊の靴音を聞き乍ら、彼の獨房を守つてゐた工兵大尉に向つて、感慨無量な面持で語つた。

「私がかうした運命で死刑に處せられるのは全く一人の女性の爲です。その女性は、驚く程美しい容貌の持主で、明敏な頭脳と實行力とを持つた、恐ろしく精力のある女です。私は一度彼女に捕まつてから、いくらもがいても遁れる事はできませんでした。彼女はいつもその問圍を征服してしまひます。高級將校でさへ、幾人彼女に捕まつてゐるか知れませんが、彼女は決して慾にくらんで間諜をやつてゐるのではないのです。燃えるやうな愛國心と、危険に對する異常な魅力とに

ひきずられて、自分から命がけの冒険の中に飛び込んでゐるのです。私のやうな弱い男が、さうした女性に一度會つたら最後です。私はあなたの幸福を祈る代りに、あなたがこの種の女性にぶつからないやうに心から祈ります』

蒼白な面に自分を嘲るやうな笑ひを浮かべ乍ら語り終つた時、看守が射撃部隊の到着した事を傳へて来た。と、彼は唇に痙攣を浮かべ乍ら、呻くやうに口走つた。

『あゝ、マドマゼル・ドクトール！』

彼は數人の歩兵に守られて、獨房から廣場にひかれて行つた。

さうして、それから幾分かの後、暗澹たるパリの冬空に鳴り響く銃聲と共に、此の愚かなるギリシヤ人の命は、永遠に此の世から葬り去られたのだつた。

彼の死刑が完全に行はれた事がパリの新聞に發表された夜、マドマゼル・ドクトールが悠々とパリを去つて、スイスを經由してベルリンへ歸つて行つた事を、フランス人は誰一人として知らなかつたのである。

ハルピンに散つた花

踊る京人形

チチチ……………。

ハルピンの銀座通、キタイスカヤ街の夜を彩る踊場「バル・アムール」の交換臺に、突然電鈴信號が起つた。もう夜も更け渡つて、コチ／＼と秒を刻む掛時計は、午前三時を示してゐる。大ホールから漏れて来る陽氣なジャズ音楽を、子守唄のやうに聞き流して、ウツラ／＼と居眠りをしてゐた交換嬢が、ふと夢を破られて、受話器のスキツチを入れかへる。

「モシ／＼、こちらはバル・アムールです。ホテル・モデルンのお客様で、洪様といふ方をお呼びするのですね。日本のキモノを着た御婦人と御一諸にゐる方です。かしこまりました。すぐにお捜ししますからお待ち下さい。あなた様のお名前は……？ お名前を申し上げなくてもわかるのですか？ はい、一寸お待ち願ひます」

交換臺からボーイ溜りへ此の事が報じられる。一人のボーイが急ぎ足で大ホールへ入つて行つ

た。

巨大なダイヤモンドのやうなシャンデリヤからこぼれる光を浴びて、愉快さうに踊り廻つてゐる百組餘りの男女、ロシア人は無論の事、アメリカ人、イギリス人、ドイツ人、フランス人、支那人もゐれば、ほんの僅かだが日本人の姿も見える。まるで世界の人種展覧會だ。その中に際立つて目立つ漆黒の髪をした一組がある。女は珍らしくも、美しい友禪模様の和服姿で、京人形のやうに襟足の上で黒髪をブツツリ切つた斷髪だ。そんな姿が年よりも若くは見せてゐるが、もう二十三四歳になるのだらう。相手の男はピッタリと身についたタキシードで、如何にも洗練された三十前後の青年紳士。

「失禮ですが、あなた様はホテル・モデルンにゐらつしやる洪様でございますか？」

ボーイに呼びかけられて、その男はふとステツプを踏む足を止めた。

「さうです。僕は洪だが……」

「お電話でございますが」

「誰から？」

「名前は申上げないでも、おわかりになるとかで……」

「あ、さう。今すぐに行きます」

男はボーイを返してから、相手の女に流暢な日本語でいふ。

「僕、一寸電話を聞いて来るよ。すぐに戻つて来るから」

彼は女を一人ホールに残して電話室の方へ消えて行つた。

ホールの周圍に設けられたテーブルに戻つて、女がボツネンと待つてゐるところへ、洪と呼ばれた男が間もなく戻つて来た。

「僕、これから一寸行く所が出来たんだ。君はゆつくりして行き給へ」

「私も一緒に行くわ。一人ぢやつまらないんですもの」

「いや、僕は一寸急ぎなのだから、一緒でない方がいい。ぢや、ホテルへ歸つて待つて居給へ。

すぐに歸るからね」

後を追つて席を立ちかける女を振り捨てるやうにして、男はあたふたとテーブルから去つて行つた。

その姿がホールの入口から消えたかと思ふと、つまらなさに歸り仕度にかゝつた女の傍に、ツカ／＼と歩み寄る者がある。

「洪夫人、一度だけで結構です。是非どうかお相手を」

懐かしい日本語で聲をかけられて、ふとその方を見ると、肩中の廣いガツチリとした紳士が、微笑をたゞへて彼女に會釋をしてゐるのだ。

「あなた、どうして私を御存知？」

ハルビンには昨日始めて来たばかりで、誰も知り合ひなどない筈なのに、どうして洪夫人なんて呼ぶのだらう？ 彼女が怪訝さうに問ひかけるのを、

「いや、僕はあなたの事をよく知つてゐるのです。さア、どうぞ……」

と、男は早くも彼女の腕を取つて、踊りの渦の中に誘ひ込まうとする。まだ何となく踊り足りない氣持だつた彼女は、たちまちその誘ひに乗つてしまつた。

「奥さん、突然で甚だ失禮ですが……」

踊り乍ら男が、彼女の耳許にさゝやきかけた。

「何ですの？」

「どうでせう、ほんの五六分間で結構です。僕と二人だけで話す機會を與へて下さるんですか？」

「あなたはいつたい誰方です？ どんな御用があるのですの？」

「それは此處では話せないんですよ。一寸スペシャル・ルームまでお伴下さらんですか。僕はあなたが神樂坂から金龍といふ名前で出てゐられた事も知つてゐるんですよ」

「まア、あなたは私を神樂坂の金龍としてお誘ひになるつもり？ 今の私は洪鍾元の妻ですよ」
「よくわかつてゐます。ですから洪夫人とお呼びしたでせう。僕はあなたを洪夫人として尊敬してゐます。それならば機會を造つて下さるでせう？」
「さうね、洪の妻として尊敬して下さるのなら……」

奇怪なランデヴー

昭和六年九月十八日、奉天郊外の北大營に銃聲が鳴り響いてから、暴戾な張軍閥を膺懲すべく蹶起した皇軍は、たちまちにして敵を邊境に追ひつめてしまつた。ソ聯との國境に近い滿洲里だの、海拉爾だのに居留してゐた我が同胞は、あまりに敏速果敢な事變の進展に、避難の時期を失つてしまつて、一度は皇軍になびくと見せかけて叛いた蘇炳文一味の匪賊に檻禁され、明日の生命も知れぬ危機に瀕してゐた。

此の事件は、さうした緊圍氣の中に起つたのである。

さて、それから間もなく『バル・アムール』のスペシャル・ルームの扉を閉め切つて、洪鍾元夫人と稱する女と、謎の日本紳士とが語り合つてゐた。

「奥さん、僕はあなたを洪氏夫人として尊敬すると共に、皇國日本の女性として尊敬したいと思ひますが……」

「まア、變な事を仰しやる事。私は日本の女に違ひありませんわ」

「では奥さん、僕の折入つてのお願ひを聞き入れて下さるでせうな？」

「あなたのお願ひつて、何ですの私はあなたの事をまるで知らないんですけれど、どういふ方だか仰しやつて下さいましな」

「いや、僕の事はたゞ祖國を熱愛する一日本人として知つて置いて下されば結構です。ねえ奥さん、あなたは洪氏がどういふ任務を帯びて奉天を發つて來られたのか、御存知ないのですか？」

「あら、洪は何も任務なんか帯びてゐませんわ、洪はもうとうに軍職を退いてゐるのですもの。私達はもうぢき日本に永住するつもりで滿洲を引上げるので、その前に一度ハルピンを見物したいと私が見がんだんですから昨日つれて來て貰つただけなんですの」

「いや、それはほんの表向きの理由ですよ。奥さん、あなたまさか、もう日本に對する愛國心を失つてしまつたのぢやないでせうね」

「まア、失禮な！」

洪夫人の顔面がキツと蒼ざめた。

「何といふ事を仰しやるのです。私は支那人の洪鍾元に嫁りましたが、やつぱり立派な日本の女のつもりですわ。その證據には、洪に張學良との縁をキツパリ切らせて、軍職から身を退かせたのも私ぢやありませんか」

「成程、その事は薄々僕の耳にも入つてゐます。然し奥さん、洪氏は決して張家と縁を切つては居らんですぞ」

「そ……そんな筈はありません。洪は私にはつきり誓つたんですから……」

「いや、あなたにはさう誓つたかもしれんですが、それは恐らくあなたを失ひたくない方便ぢやないですか。事實は決して縁が切れてはゐないのです。洪氏が急にハルビンへ来るやうになつたのは、學良の重大な密令を持つて來てゐるのです」

「そ……そんな事、私、絶対に信じられません。洪が私を欺すなんて……」

「よろしい。それでは證據をお目につけよう。奥さん、洪氏は先程、あなたを一人此處に残して、急に何處かへ消え去りましたね。あなた、洪氏が何處へ行つたか御存知ですか」

「いゝえ、それは知りません」

「それぢらんなさい。洪氏にかゝつて來た電話が何だかお聞きになりましたか？」

「いゝえ、別に……」

「ぢや、お教へしませう。實はあの電話は、洪氏を誘き出す爲の、我々一味の偽電話なんですぞ」

「まア……」

「洪氏は蘇炳文の密使と會見する目的で、此處を出て行つたのです」

洪夫人は不安さうに唇をふるはせて膝を乗り出した。

「あの、洪は……洪はどうかされるのですか？」

「いや、御安心なさい。たゞあなたと僕と二人だけで語る機會を造るのが目的なのですから、今夜は洪氏も無事に戻つて來られるでせう」

紳士は冷たい微笑を浮べ乍ら語り續ける。

「奥さん、洪氏は黒龍江軍の密使に、學良の或る秘密指令を渡すのが目的で此處へ來たのですぞ。我々としては、今洪君を捕縛する事はわけないです。然し、我々の手で捕へられれば、洪氏は叛逆者として銃刑に處さなければならん。それには惜しい人です。士官學校に在學中にも、洪氏の頭のいゝ事は評判でした。今後大いに滿洲の爲に働いて貰ひたい人です。どうでせうな、奥さん、もう一度あなたから洪氏を説いて、翻意して貰ふ自信はないですか？」

「まア、それぢや本當に私を欺してゐたのでせうか？ さうとすれば、私きつと、説き伏せてみせますわ」

「さう願へれば、我々の爲にも、又洪氏の爲にも、あなたの爲にも此の上ないと思ひますね。で、洪氏の携へて來てゐる指令ですが、それは恐らく滿洲里や海拉爾に檻禁されてゐる多くの同胞の運命を決定するものだと思います。いはば、あなたの努力如何によつて、あの危機に頻してゐる同胞が絶望になるか、救はれるか定まるともいへるのです。無論學良の指令は絶望的なものでせう。それを洪氏によつて反對のものにして戴きたい。それが僕のあなたに切望するお願ひなのです。あなたも日本の一女性として、多くの同胞を惨虐な運命から救ふ責任を感じませんか」

「わかりました」

洪夫人は悲痛な表情を浮べて、決然と答へた。

「私は洪鍾元の妻ですが、私の體には日本の血が流れて居ります。どうかお信じ下さい」

「有難う。よくいつて下さつた」

紳士は思はず洪夫人の右手を握りしめて、つとソファから腰を浮かせた。夫人は追ひ纏るやうに問ひかける。

「あの、あなたにお會ひするには、何處へお訪ねしたらいいのでせう？」

「僕ですか。實は僕、奉天からつとあなたの傍を離れなかつたのですよ。御存知なかつたでせうな。今もあなたの方と目と鼻の二百五十五號室に居るのです」

「まア、やはりホテル・モデルンの……？」

「さうです。あなた方があすこにゐる間は、僕もあの部屋にゐるでせう」

こんな密談が交はされてゐるのを「バル・アムール」のロシア人ボーイは、いつもの甘いランデヴーとも思つた事だらう。誰一人彼等を怪しむ者はなかつた。

惱ましい思ひ出

日本の内地ならばもうほのぼのと黎明の訪れる頃だが、北滿の冬の曉はまだ闇だった。キタイスカヤ街の曉闇を横切つて、厚いシールの外套にくるまつた女が、白い息を凍らせ乍ら夢遊病者のやうな足取りで、悄然とホテル・モデルンに歸つて行く。洪夫人龍子だ。

ホテルでは、いかめしい金ピカの制服を着た扉番が、眠不足な顔をして入口に立つてゐるだけで、廣間にももう人影はない。その静かさが彼女には嵐の起る前の不安を包んでゐるやうに思はれた。

洪はまだ歸つてはゐなかつた。彼女は外套をベッドの上に脱ぎ捨てると、ふつくらとしたソファにどつかり身體を埋めて、深い物思ひに沈んで行つた。

（あゝ、洪は私に嘘をついてゐたのかしら……？ お前の爲になら、僕は何でも捨てゝしまふなんていつてゐたのに……）

涙がホロリと美しい頬を流れ落ちた。

三年この方の思ひ出が、夢の走馬燈のやうにめまぐるしく、彼女の頭の中をかき亂してゐた。彼女が金龍と名のつて神樂坂に左棲をとつてゐた頃、屢々彼女達を酒席に招く若い支那人の一團があつた。それは張學良の弟、學銘をとりまく青年達である。

ある夜、その一團の中に見馴れぬ青年が一人加はつてゐた。眉目秀麗、何處となく氣品の備はつた紳士だった。その夜、不思議な運命の絲が、金龍をその青年に結びつけたのである。

『君はどうして藝者になつたのですか？』

遊び馴れぬ男がよく訊ねる野暮な言葉だった。大概の場合、いゝ加減な出鱈目でごまかしてゐた彼女だったが、どうした風の吹き廻しか、その夜は妙に眞實を語る氣持になつてゐた。

『私の家は、昔は東京でも指折りの筆屋だつたのよ。昔は随分筆が賣れたもんですけど、此の頃ぢや筆を使ふ人なんてありやしないですよ。それなのに、お父さんはどうしても商賣を變へやうといはないの。昔氣質の頑固な人で、まア名人氣質とでもいふのでせうね。それでとうく破産てしまつて、お父さんは私達兄弟を残して亡くなつたのよ。えゝ、あれでも半年位患ひついた上で……』

二人の弟と一人の妹を抱へて、その日の生活に追はれてゐる母の苦衷を黙視できずとうとう自から藝者に身を落したといふ話を青年はしんみりとして聞いてゐた。

それから二三日経つて、ふと何気なく呼ばれた座敷に、その支那青年がたつた一人で座つてゐた。

『これ、少いですけど、君の弟さんや妹さんに上げて下さい』

手の切れるやうな百圓紙幣をさし出されて彼女は目を見張つたものだつた。

それから五日目、一週間目位には、きつとその青年が彼女を呼んだ。この青年こそ、當時日本の陸軍士官學校を卒業して、歸國間際だつた洪鍾元なのである。間もなく彼は遠く故國に歸り去る日が來た。

『金龍さん、僕はあなたと別れて歸るのがたまりません。僕と一緒に滿洲へ行つてくれませんか、支那人は幾人も妻を持ちますが、私はあなた一人を愛します。ねえ、僕と結婚して下さい。その代りあなたの弟や妹などは決して困らせはしませんよ。頼みます』

眞情を面に現はして繼る洪を、彼女は振り切る事ができなかつた。のみならず、丁度その頃、優秀な成績で中學を出た彼女のすぐ下の弟が、上の學校に進みたい希望を漏らしてゐた。

(さうだ、どうせ泥水に染つた自分、まともに家が持たれるわけではない。國籍は違つても洪は心から自分を愛してゐるのだ。さうなつた方が幸福かもしれない。弟や妹たちも安樂に過せるだらうし……)

彼女は洪に従ふ決心をしたのだつた。

彼女の身體は千五百圓といふ大金で取引された。その他にかなり莫大な置土産を、洪は彼女の弟妹達に残して、金龍ならぬ龍子を故國に伴ひ歸つたのだつた。

滿洲に錦を飾つてからの洪は、張學良麾下の少壯士官としてめき／＼頭角を現した。事變勃發前、彼は既に參謀少佐になつて、かなり重要な地位を占めてゐたのである。が、日に／＼險惡の度を深めつゝあつた日支の風雲を前にして、龍子は彼に軍職を去るやうに幾度か勸告したものだつた。そして、事變の起るほんの三日ばかり前、洪は決然と軍職を捨てたのである。

『龍子、僕は君と軍職とを秤にかけて、随分長い間悩み通したが、僕には自分の榮達よりも君の方が大切だつた。もう今日から張學良の軍人ではないのだよ』

誠心こめて云つた洪を、彼女はどうして疑ふ事ができるだらう。

『信じられない。信じられない。洪が日本に弓をひくやうな男だらうか？ 私を裏切るやうな男』

だらうか？」

彼女は撫然として薄暗いスタンドラムプの灯影を見つめるのだつた。

その頃、凍りついた松花江岸の闇の中に、人目をはゞかるやうにそはくしながら、ポツネンと立つてゐる人影があつた。洪鍾元である。

『はてな？ もう三十分近くなるのに……』

支那語でつぶやき乍ら、腕時計をのぞいてみると、夜光針がもう四時を廻つてゐる。

『こりやいかん。うっかりすると、途中で何かトラブルが起つたのかもしれない。さうだ、今夜はあきらめた方がよささうだぞ』

彼は前後の闇を注意深く見廻はしてから、足早にスタ／＼と去つて行つた。

恩愛二筋道

『おや……？ まだ起きてゐたのかい。なアんだ先に寝てゐればよかつたのに』

さういひ乍らいつもの温顔を装つて部屋に戻つて来た洪を迎へて、龍子は心の激するのをちつ

とこらへた。

『え、何となくあなたの事が心配になつたので……』

『僕の事が心配に……？ ハツハ……、バカだなア』

笑ひにまぎらせて歩み寄る洪をスツと交して、龍子はピンと扉に鍵を下ろした。そしてツカツカと洪の腰かけてゐるソファに戻るといきなりその前に立つて問ひかける。

『ねえあなた、こんな時間に何處へいらしたの？』

『なアに、一寸……』

『私におかくしになるの？』

『いや、かくすわけぢやないが……。おや？ どうしたんだ？ ひどく顔色が悪いぢやないか』

洪は話を他に外らせやうとする。

『あなたも随分顔色が悪いわ。さ、何處へ行つたのか話して頂戴』

『なアに一寸友達の家だ』

『嘘々。こんな真夜中にお友達の家を訪ねるなんて……』

『いや、急な用件があつたのでね』

「どんな御用……？」

「ハツハ……。變な女の所にでも行つたと思つてゐるのかい？」

「あなた、誤魔化さないで下さいね」

「バカだなア。やいてゐるのかい？」

「いゝえ、あなたは私にかくしてゐる事がありません」

「な……何を？」

「あなたはどういふ御用でハルビンへいらしたんです？」

「君が日本へ歸る前に一度ハルビンを見たいといふからさ」

「いゝえ、嘘です」

洪がまことしやかに辯明するのを、彼女はキツパリと否定した。

「おい、ど……どうしたんだ？ 龍子」

やゝ狼狽を見せ乍ら、それでもわざと笑顔をつくつて彼女の肩を抱かうとするのを、龍子はい

きなり拂ひのけた。

「あなた、どうかお願いですから本當の事をいつて頂戴。あなたは私に軍職を捨てたと仰しやつ

たけれど、まだ張學良との縁は切つてゐないのでせう？」

「え……？ な……何をいふのだ？」

「私は知つてゐます。あなたは何か學良の秘密指令を……」

「シツ、靜かに」

こみ上げて來る激情に聲の高まるのを、洪はあわてゝ制した。

「おい、何をいふのだ。バカだねえ。僕はちゃんと軍人を止めてゐるぢやないか。それもみんな君の爲なのだぜ」

「嘘です。それではどうしてさつき、偽電話なんか誘ひ出されたんです？」

「えッ……！ 偽電話……？」

洪の狼狽はもうかくし切れなかつた。

「ど……どうしてそんな事を……？」

「私は何も彼も知つてゐるのです。あなたは私と軍職とを秤にかけたといひましたね。あれは私と張學良とを秤にかけたわけではなかつたのですか？ 私を欺してまでも學良に盡さなければならぬのですか？ はつきりお答へ下さい。學良をお捨てになるか、私をお捨てになるか。私は

今日迄、自分の身も、誠心もあなたに獻けて來ました。けれども、私は日本の女です。魂までも賣る事はできません』

『ウームさうか』

洪は唸くやうに吐き出した。そして長いためいきを漏らしてから力無く言葉を繼いだ。

『ねえ龍子、僕は君を愛してゐる。誰よりも君を愛してゐる。それは信じてくれるね。だからこそ君を欺さなければならなかつたのだ。僕の一家は張家に非常に恩になつてゐる。父の頃からの恩義だ。支那の軍人は平氣で恩義を裏切るやうに思はれてゐるが、さうでない人間もゐるのだよ。殊に僕は日本の士官學校で武士道を教へられて來てゐるのだ。武士道は恩義を裏切つてもよいとは教へないよ。僕には張家を裏切る事はできない』

血を吐くやうな言葉だつた。

『けれども、あなた、學良のしてゐる事は決して正しい事ではありません』

龍子はやつと反駁の言葉をみつけ出した。

『うむ、それは僕にもわかつてゐる。然し、僕等のやうな者が諫言したところで、それが何の役に立つといふのだ。正しくないとは知り乍らも、それについて行くよりは仕方がない。それが恩

義に酬ゐる道なのだから』

『さうですか。それではどうしても、張家に判く事はできませんのね』

『……………』

洪はもう答へなかつた。暫く心の苦悶にあへいでゐるらしかつたが、聽てかすかに肯いて見せるのであつた。

『わかりました』

龍子のはがつかりしたやうに吐き出してからもう一度洪の顔を見直した。

『それぢやあなた、たつた一つだけお願いがあるんですけれど……』

『何だ？』

『張學良から托されて來た密書を私に下さない？』

『そ……そんなものはない』

『ではもう一つ、滿洲里と海拉爾とに檻禁されてゐる日本人を、あなたの力で助け出して下さいな？』

『僕にそんな力があるもんか』

「どうしてもいけませんの？」

「……………」

又洪は黙り込んでしまった。

洪の横顔をヂツと見詰めてゐる龍子の眼から、ハラ／＼と大粒の涙がこぼれ落ちた。それは何か悲痛な決意との苦闘を示してゐた。

と、次の瞬間である。彼女の右手がサツと力強くひらめいた。

「ウムツ……………」

洪が異様な唸めきと同時に、ソファから立上つた。逃げるつもりだつたか、反抗を試みるつもりだつたか、それとも反射的に立上つたのか？ 然し、彼にはもう何をする餘力も失はれてゐた。龍子の右手で握りしめてゐる短刀が、彼の心臓の眞上にグサとつきさゝつてゐたのである。

崩れるやうに倒れかゝる洪の身體を、龍子はあわてゝ両手で抱き支へた。

『ごめんなさいね、あなた。あなたは立派な方ですわ。あなたのやうな方に愛された私はほんとうに幸福でした。あなたの恩義は立派になし遂げられたのよ』

洪の上半身を力一杯抱きしめて、耳元に小聲で呼びかける龍子の聲は、もう洪の鼓膜に響かな

かつたかもしれない。

龍子の華やかな友禪の袖に、眞赤な血しぶきがにじんでゐた。

日本 の 女

北満の冬の長夜もやうやく明け放れて、窓には清々しい陽光がさしそめてゐる。

コツ／＼／＼……………」

ホテル・モデルンの二百五十五號室の扉を外からあわたゞしくノックする者がある。龍子だつた。

扉が内側からサツと開かれると、例の日本紳士が「バル・アムール」の時と同じ服装のまゝ顔を見せた。その隙間から、龍子は轉げ込むやうに室内に侵入した。

「ど……………どうしたんです？ 奥さん』

彼女の袖を染めてゐる赤黒い血しぶきを見て、紳士はギョツとした。

「だめでした。私……………洪を説き伏せるお約束をしましたけれど、あの人の心を動かす事はできま

せんでした。許して下さいまし。そ……その代り、こ……これを持つて参りました。洪のチョッキの内側のポケットにあつたのです」

あへぐやうにいつて、龍子は帯の間か封蠟で固く密閉された封書をぬき出した。そして、そのまゝぐつたりと、傍らのソファに崩れかゝるのである。

紳士は奪ふやうに封書を手に取つた。見ると「蘇炳文大人」の五文字がクツキリと浮き出している。

「奥さん、洪君を殺つてしまつたんですか？」

彼は龍子の崩れてゐるソファに寄り添つて顔をのぞき込んだ。その顔のなんと蒼ざめて生気を失つてゐる事だらう。

「おや……？ あなたも……？」

「何もお訊き下さいますな。私は洪と一緒に参ります。私は洪の妻なんですもの。ですけれど、たとへ洪の妻になつても、私は日本の女ですわ。日本の女として出来る限りの事をしたつもりですわ。あとはどうかあなたの方のお力で皆さんをお助け下さいまし。そ……それから東京にゐる母や弟妹達に、龍子は日本の女として立派に死んだと傳へて下さいましね。私とても幸福ですわ」

それだけ一氣に語り続けると、彼女は苦しさうに口をつぐんだ。

「奥さん、有難う」

紳士は細かく震へる彼女の手をしっかりと握りしめた。

「あなたは立派な日本の女です。きつと僕等の手で満洲里や海拉爾に檻禁されてゐる同胞を救つてみせますよ。安心して下さい。決してあなたの誠心は無駄にしませんから」

龍子はもうそれには答へないで、力無くうなづきながら満足さうな微笑を浮べるのだつた。

その頬にはもう異様な痙攣が起つてゐた。

彼女は満洲に來てから、誰しもがよく用ひるモルヒネを時々用ひてゐた。それを多量にのんで來てゐたのである。

それから間もなく彼女は奇怪な紳士に手をとられたまゝ、永遠に目醒めぬ眠りに陥ちて行つたのだつた。

封蠟に密閉された封書——その中には何が記されてあつたらうか？

それは永遠の秘密として我々の知る由もない事だ。だが、叛將蘇炳文によつて檻禁されてゐた

多くの同胞は、それから數日にして救ひ出されたではないか。

此の事實と封書の内容との間に、何か一脈の關聯を筆者は想像せずにはゐられない。北滿にあへなく散つた大和撫子も、地下に此の事實を喜んでゐるに違ひない。

二百五十五號室の怪紳士——それが何者であるか？ これはこゝに改めて説明をする必要はあるまい。

撃滅されに行く大艦隊

ドツガーバンクの悲劇

話は一寸古く、一九〇四年の出来事だ。

一九〇四年——日本の年號に書き直すと、それは明治三十七年になる。我々日本人にとつては永久に忘れる事のできない日露開戦の年だ。その十月十五日の朝、ロジエストウエンスキー提督に率ひられた太平洋第二艦隊、或はこれをバルチック艦隊とも稱された三十五隻から成る大艦隊が、はるる東洋の戦場めざして、根據地リバウ軍港を抜錨、征途に就いたのである。

途中別にさしたる障害もなくバルチック海を横切り、海口を扼するスンド海峽、カテガツト海峽も通過して、十月二十日の正午頃にはスカゲン岬沖を廻つてスカゲラツク海に出た。デンマークの突端とノールウェイの突端とが相抱き合つた水道だ。此の水道が西に擴大されると洋々たる北海になる。

翌二十一日からいよいよ北海横断のコースに入り、二十二日の夜に入つてから、艦隊は舳艫相

舎んでドツガーバンクにさしかゝつた。東にオランダ、西にイギリス本國を控へた北海の南端、英佛海峽の北端に當る海域だ。

と、突如、旗艦クニヤージ・スウォーローフ號の前橋監視臺から傳聲管を傳つて、異様な唸めくやうな怒號が艦橋に響いて來た。

「日本の水雷艇隊だツ！ 灯が見えるツ！！」

その聲にハツとして遙か西方の黒闇々な海上に瞳を据えると、正しく何隻かの船隊の燈火が、チラ／＼と明滅し乍ら南方へコースをとつて、自分達の艦隊と並行し乍ら進んでゐるではないか。

「砲撃準備ツ！」

狼狽した艦橋勤務員は又してもその傳聲管に口を當て、上ずつたやうな聲で叫びかけた。寢呆け眼の水兵達があわてふためいて甲板上に駆け集り、一瞬の後にはもうズド……ンと猛烈な砲聲が、静まり返つた闇夜をつんざいてゐた。旗艦の砲聲に驚いた他の船も、あわて、砲撃準備にとりかゝり、たちまちにして静穏な闇の海上が修羅の巷と化したのである。

だが、日本の水雷艇隊がはる／＼何萬哩の海を越えて、ヨーロツパの涯の北海くんだりまで出

かけて行つてゐただらうか？ いや、當時我が艦隊は旅順港の封鎖と日本海の警戒に全力を注いでゐる眞最中で、そんな遠方までオチヨツカイを出しに行くやうな暇はない。多少とも當時の戦況を知つてゐる者なら、常識でも想像される筈である。

では彼等が海上に認められた燈火は何だつたらう？ あゝ、何と滑稽極まる事ではないか。それはイギリスのトロール漁船の船影だつたのだ。スピードの遅い漁船が、大艦隊からの一斉射撃を被つたのだからたまつたものではない。たちまちその一隻は船腹を撃ち抜かれて、眞倒さまに水底に沈んで行く。他の數隻はやうやく盲砲撃の難を遁れて、傷だらけになつて逃げ了せたのであつた。

しかももつと悪い事には、ロシア艦隊側では目標物が漁船であつたと認識を確めた後でも、遭難者の救助作業も行はず、そのまゝスタコラと南に向つて進航を續けた事である。

此の事がドツカーバンクの西方百五十哩にあるイギリスのハル港に傳はり、そこからイギリス全國に急報が飛ばされたからたまらない。當時イギリスは日本と攻守同盟を結んでゐた友邦の事だから、此の奇怪極まる椿事に對して勃然と怒り立つてしまつた。

何も知らずに賜暇歸國中だつたベンケンドルフ駐英ロシア大使が、その翌日ひよつこりイギリ

スに歸任して来て、チエアリング・クロス停車場に降り立つてみると、驛前は山のやうな群集に埋められ、一齊にいきり立つて大使一行に攻め寄つて来る。知らぬが佛の大使は膽をつぶしてしまつた。嘲罵と投石の雨をくぐりぬけて、命からく停車場の一室に逃げ込む、急を聞いて駆けつけた警官の鎮壓でやうやくその場は納つたが、とんだとばつちりを受けたものである。

いや、そればかりではない。輿論がさうまで激昂した程だから、イギリス政府も此の事件に對して黙つてゐる筈はない。ペテルスブルグの皇帝に對して嚴重な抗議が提出され、いざとなればイギリス全艦隊を擧げて、暴戾極まるロジエストウエスキー艦隊を撃滅せんばかりの意氣込みとなつたので、遂に本國政府は命令を發し、全艦隊をスペインのピゴ灣に足止めさせて、その間に外交交渉を行ふ事になつた。當時ロシア側に秋波を送つてゐたフランス政府が英露の仲に立ち、皇帝の陳謝と損害の保償とでやうやく事件が落着して、艦隊がピゴ灣を出港できるやうになつたのは、その月の三十一日の事である。

東洋の戦線では日毎に旅順が危険に瀕してゐる。陸では沙河の戦線を放棄して奉天附近に退く止むなき状態になる、といつた有様で、一刻も早く駆けつけなければならぬバルチック艦隊が、とんでもない道草を喰はされてしまつたのであつた。

さて、いつたいバルチック艦隊ともいはれるものが、何をとまどひしてイギリスの漁船を日本の水雷艇と誤認したりしたのであらう。そこにはちやんとそこがある。記憶すれば飄箆も幽霊に見えるたとへで、彼等は日本の謀報網の繰る糸にまんまと乗せられてゐたのである。

ジブシー占術師

その頃、バルチック海に臨んだ軍港リバウの町に、不思議な人気を呼んでゐた占術師が住んでゐた。ジブシーの婆さんで、それが何時頃何處から流れ込んで来たのか、殆ど知る者がなかつたが元々ジブシーといふ民族は轉々として流れ歩く流浪の民の事だから、別に詮索してみやうとする物好きもなかつたのだ。

殊に此のジブシー婆さんの人氣は、水兵達の集るカフェーだの、酒場だのに根を張る女達の間、に素晴らしく、明日の幸運を夢みる彼女達は、競つて此の婆さんの許に通ひはじめた。婆さんは首に異様な珠数みたいな首飾りを澤山ぶら下げ、東洋風の頭巾をスツボリ被つて、前に大きな水晶の珠を置き、それをヂツと見詰め乍ら怪しげな豫言を行ふのだ。婆さんにいはせると、その水

晶の珠の中に占ひを乞ふ人の將來の姿が浮んで来るのださうだ。無論、それは婆さんにだけ見えるので、お客様には見えはしない。

婆さんは鹿瓜らしい顔をして、

『おや、お前さん情夫がおありなさるね?』

と訊く。そんな女の事だから、無論一人や二人の情夫がない筈はない。

『え、ありますわ』

『それごらん、みんな此の珠の中に映つてゐる。なか／＼立派な男つぶりぢやないか』

『オツホ……。それほどでも……』

『船に乗つてゐなさるんだね?』

『え、水兵なんですの』

『水兵といはないでも、私にはちやんと判つてゐるよ。此の珠の中に見えるもの。然し、お前さん、その水兵さんと手を切つた方がいゝと思ひますよ』

『あら、どうして? そんな浮氣者ぢやない筈だけれど……』

『いや、浮氣者といふわけぢやない。どうして／＼お前さんには首つたけななだけれど、その人

と深くなつてゐると、いまに大變不幸な事が起ると思ふがねえ』

『まア、不幸な事つて？ 私、いまに捨てられるのかしら？』

『なアに、お前さんを捨てはしないだらうけれど、結局お前さんは別れなければならなくなる。』

といふのは、その人は此の先あんまり長くは生きてゐられまいからね』

『あら、それぢやあの人は若死するんですか？』

『お氣の毒だけれど、今の儘では長生きはできませんね。うつかりすると今年のうちに、いや、』

もう二三ヶ月うちに何か變事が起りはしないかしら？』

『まア、私、どうしませう？ 何とかしてその災難から免れる方法はないんでせうか？』

『そりやない事もないさ。どうも今の仕事がよくないんだから』

『今の仕事といふと、水兵がいけないんですの？』

『さうですよ。お前さんの情夫の乗つてゐる船は、近いうちに何處かへ出港しやしないかしら』

『え、何でもウラジヴオストツクの艦隊を助けに、東洋へ行くやうになるかもしれないなんて』

いつてましたわ。さうなると戦時手當が澤山貰へるから、私にもダイヤの指輪を買つてくれるな』

んて……』

『あツ、それだ。それがいけない』

『まア、どうしてそれがいけないんですの？』

『そりやお前さんが心から惚れてゐないのならいゝさ。ダイヤの指輪が只儲けになるんだからね。だけど、お前さんが惚れてゐるんだとすると、ダイヤの指輪よりか、その人の命の方が大切な筈だからね』

『さうすると、あの人は東洋へ行くと戦死でもするといふんですか？』

『東洋どころか、うつかりすると東洋迄行き着かないうちにとんだ事件が起るかもしれない。どうもさういふ卦が出てゐるもの』

『まア、私、どうしませう？』

『私は決して嘘はいはないから、ゆつくり考へてごらんさいよ。相談する人があつたら誰とでも相談をしてね』

こんなとんでもない御託宣を婆さんから受けた女は、夜になつて朋輩の女達に顔を合せると、誰彼の差別なく此の御託宣を吹聴して相談を持ちかける。軍港ではなんといつても水兵さんが人氣者だ。従つてそんな女達は何れも大概水兵を情夫に持つてゐる。此の相談を持ちかけられた女